

東京湾西岸における弥生時代～ 古墳時代前期の貝類資源利用

—赤羽台遺跡・弥生二丁目遺跡・諏訪下北遺跡・上台北遺跡・
三殿台遺跡・間口洞窟遺跡の資料調査報告—

吉永 亜紀子

はじめに

東京湾地域は日本考古学発祥の地とされる大森貝塚で知られるように、縄文時代の貝塚が密に分布し古くから調査研究が行われてきた地域である。検出された貝層のサンプリングとフルイを用いた水洗乾燥選別が実施されている貝塚も多く、動物遺体や骨角貝製品に関する基礎データと研究報告が充実している地域でもある。東京湾地域の縄文時代貝塚は、晩期に入ると貝塚の規模、分布が希薄となり、東京湾西岸では弥生時代中期まで貝塚の形成がみられなくなる（樋泉 1991）。弥生時代中期以降に形成される東京湾西岸の貝塚は、台地上の集落遺跡に伴う小規模な貝塚と三浦半島南部の海蝕洞窟遺跡群に伴う貝塚に大別され、縄文時代貝塚のような大規模な貝層の形成が見られない点が特徴である（樋泉 1991）。東京湾地域の弥生時代貝塚については、樋泉（1991）や杉山（2018）において集成されており概要を知ることができる。しかし、縄文時代の貝塚に比べ貝層の定量的な報告が行われている遺跡は少なく、貝層の内容が不明のまま現在に至っている遺跡もある。農耕が開始される弥生時代において、東京湾地域ではどのような貝類採集活動が行われていたのか、どのような貝類資源利用があったのかといった研究を進めるためには、出土貝類遺体の内容を明らかにすることが必要不可欠である。そこで、東京湾西岸の弥生時代～古墳時代前期の遺跡を対象として資料調査を実施した。本稿ではその資料調査成果を報告し、周知の遺跡の内容も含めた若干の考察を行う。

資料調査対象と方法

資料調査対象とした遺跡は、東京湾西岸の荒川から三浦半島南端部にかけての地域に所在する弥生時代～古墳時代前期の貝塚である。赤羽台遺跡（東京都北区）、弥生二丁目遺跡（東京都文京区）、上台北遺跡・諏訪下北遺跡・三殿台遺跡（神奈川県横浜市）、間口洞窟遺跡（神奈川県三浦市）の出土貝類遺体を対象とした。肉眼による観察と同定、デジタルノギス（シンワ品番 19979）を用いた計測、デジタルカメラによる撮影を行った。腹足綱は殻口部、二枚貝綱は殻頂部が遺存する個体を 1 個体として計数した。また、破片であっても適宜 1 個体として計数し一覧表に加えた資料もある。貝類の部位名、分布は松島（1984）、黒住（2021b）に依拠した。

結果

赤羽台遺跡（弥生時代後期）

東京都北区赤羽4丁目に所在する（図1-①）。武蔵野台地東縁の標高約20mを測る台地先端部に位置し、遺跡の北東側には荒川が流れる。鉄道建設に伴い1982～1983年に発掘調査が実施された。弥生時代後期から古墳時代前期を中心とした遺跡で、旧石器時代から近代の陸軍施設にわたる各時代の遺構が広範囲に重複している。弥生時代後期から古墳時代前期の住居址228軒、方形周溝墓2基、環濠、方形区画溝等が検出されている。発掘調査報告書に報告されている貝層の内容は定性的記載であり、まとめると以下の通りである（東北新幹線赤羽地区遺跡調査会編1992）。

・環濠（弥生時代後期）

Ⅱ区23グリッド「わずかではあるが貝層が検出された」、Ⅲ区115グリッド「カキ殻を主体とし、ハマグリ」の殻がわずかに含まれる貝層が検出された」、Ⅳ区153、161、164、165グリッド「貝層が検出された」、Ⅴ区181グリッド「貝層が検出された」（東北新幹線赤羽地区遺跡調査会編1992）

・YK148号住居址（弥生時代後期）

「覆土の中から、おびただしい量のマガキを主体とした貝殻の堆積を検出した」「貝層から鳥骨破片2点、鹿角破片2点、シカ指骨破片1点」（宮崎1992）

赤羽台遺跡から出土した貝類遺体は、北区飛鳥山博物館に保管されている。木箱に収納されており、貝類遺体には数字が書かれたシールが貼られていた（図2）。貝層の採集方法、篩を用いた水洗乾燥選別実施の有無は発掘調査報告書に記載がなく不明であるが、水洗済みの状態で収蔵されていた。資料調査の結果、同定された分類群は腹足綱1種、二枚貝綱3種である。腹足綱ではアカニシ棘状結節の破片1点、二枚貝綱ではマガキ3,426点・ヤマトシジミ11点・ハマグリ181点、同定資料数にして計3,619点を数えた（表1）。最小個体数に基づいて作成した出土貝類組成ではマガキが95%を占めている。貝類遺体の取り上げ方法や篩を用いた整理作業の有無で生じるバイアスを考慮しても、マガキを集約的に採集していたことが指摘される。

マガキの形態に着目すると、殻頂から腹縁にかけて縦に長く成長した細長い個体がほとんどで、湾曲した個体が少ないという特徴が認められた（図4、図5）。マガキの形態については、泥の中に直立して礁を形成する個体群は細長い形態を呈するという指摘があり（鎮西1982）、赤羽台遺跡周辺で採集されたであろうマガキの生息環境を考えるうえで興味深い所見といえる。左殻には、マガキ同士で固着した状態で出土している個体も観察された（図6）。右殻では、細長く成長した個体が多いためか殻中央部で割れ、殻中央部～腹縁が欠損している個体が散見された（図7）。計測可能な個体が多かったマガキ右殻431点の殻高を計測した。殻高の最小は19.6mm、最大は145.1mm、平均は68.0mmであった（図8）。殻高55mm～65mmにピークが見られた。

マガキとハマグリでは貝製品が発見された。マガキでは、径約3mmの正円形の穿孔が施された貝製品が左殻2点、右殻1点、計3点確認された（図9、図10、図11）。器種は不明である。特にマガキ貝製品-1では、穿孔が施されている箇所は殻の厚みがある部位であり、埋蔵の過程や調査時に偶然破損して生じた穴とは考え難く、他の水生生物による捕食痕とも形態が異なる。穿孔の形態やサイズが揃っていることから人為的な穿孔と考えた。ハマグリでは、右殻を利用した貝刃2点が確認された（図12）。いずれも縄文時代に見られる貝刃と同様の形態を呈しており、腹縁の外層を内面から連続して剥離し刃部を作出している。

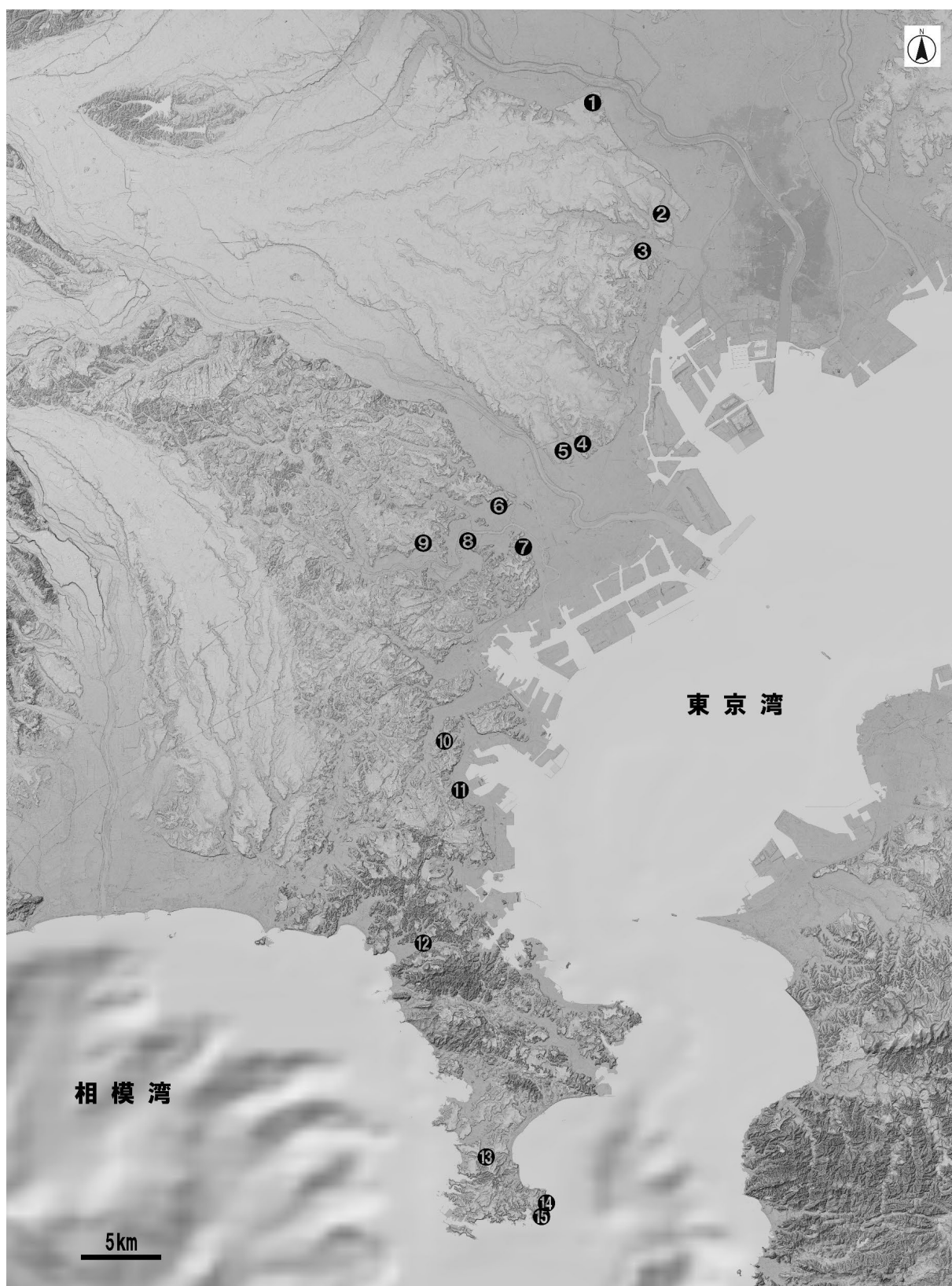


図1 貝塚を伴う弥生時代～古墳時代前期の遺跡

- ①赤羽台遺跡 ②弥生二丁目遺跡 ③九段坂上貝塚遺跡 ④熊野神社遺跡 ⑤久ヶ原遺跡
 ⑥諏訪下北遺跡 ⑦上台北遺跡 ⑧牢尻台遺跡 ⑨折本西原遺跡 ⑩三殿台遺跡
 ⑪杉田東漸寺貝塚 ⑫池子遺跡 ⑬赤坂洞窟遺跡 ⑭大浦山洞窟遺跡 ⑮間口洞窟遺跡

表 1 赤羽台遺跡出土貝類遺体集計表

ラベル 分類群		E環濠 24G貝	セ・B環濠						セ・J南環濠										セ・ア 南環濠	計
		O-60 P-76	L-27 Q-47	O-23 P-74	O-24 P-103	P-18 Q-48	P-30 Q-49	L-58 なし	O-27 なし	O-42 N-12	O-43 N-14	O-45 N-43	O-46 N-49	O-44 N-32	O-57 N-55	O-60 P-76	O-61 L-22	Q-64 P-70	Q-58 N-67	
アカニシ		破片												1						1
マガキ	L	14	43			113	37	290	247	302	4	1	1	15	647	1	88	118	3	1924
	L 製品																1	1		2
	R		1			98	27	5		199	117	307	401	3	21			3	317	1499
	R 製品											1								1
ヤマトシジミ	L			4																4
	R			7																7
ハマグリ	L		4	58	41	1														104
	R		11	13	47	6														77
計		14	59	82	88	218	64	295	247	302	203	118	309	417	650	22	89	122	320	3619



図 2 貝類遺体保管状況

ヤマトシジミ (7点) ハマグリ 5% (104点)

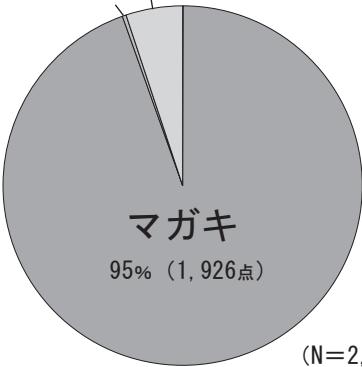


図 3 赤羽台遺跡出土貝類組成

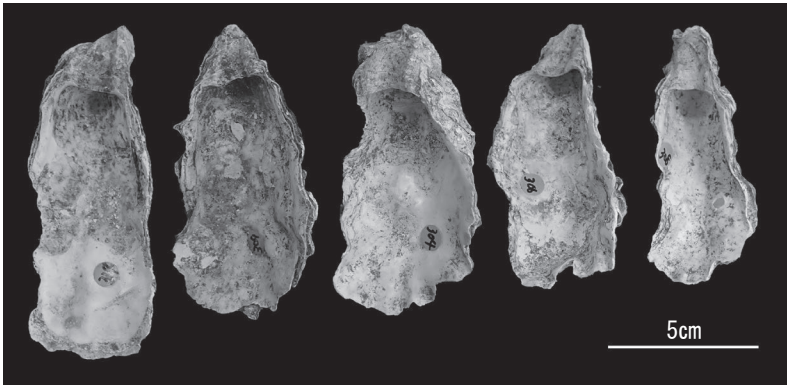


図 4 マガキ左殻

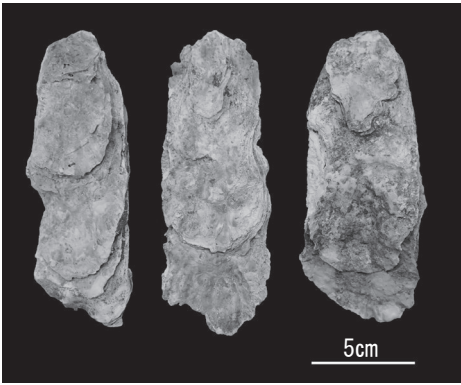


図 5 マガキ右殻

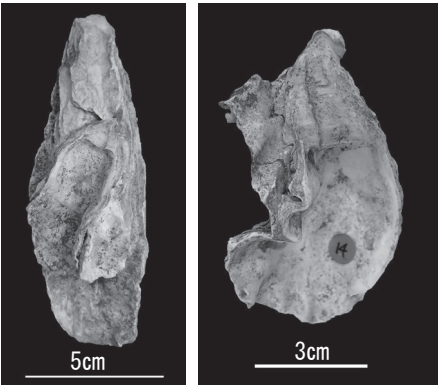


図 6 マガキ同士の固着

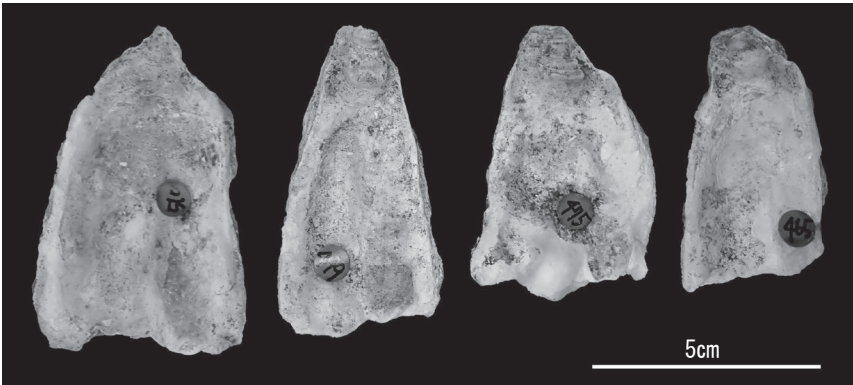


図 7 殻の中央部～腹縁が割れ欠損しているマガキ右殻

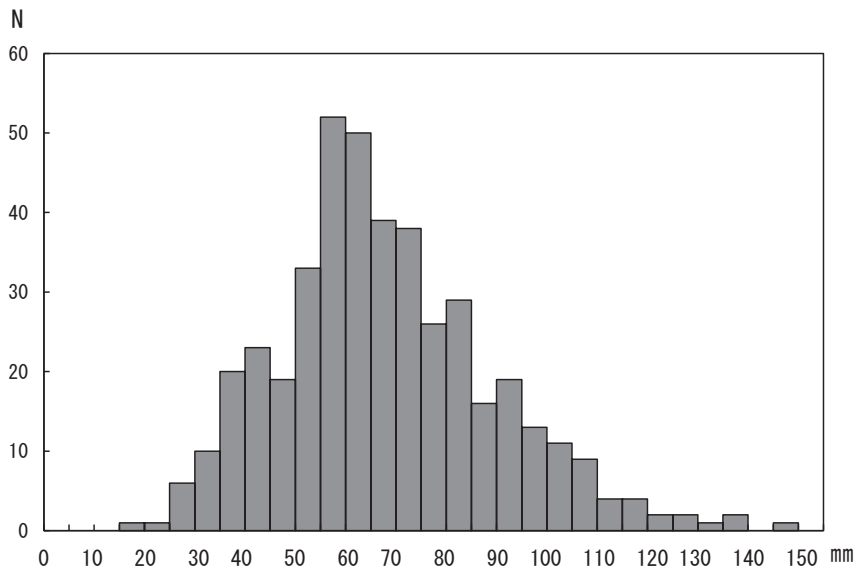
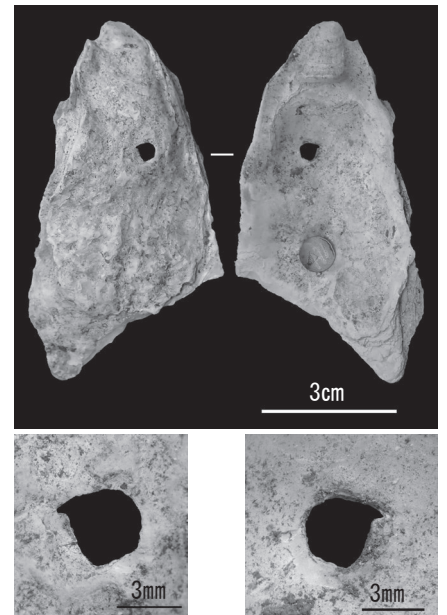


図8 赤羽台遺跡マガキ殻高分布 (N = 431)



穿孔外面拡大

穿孔内面拡大

図9 マガキ貝製品-1 (右殻)

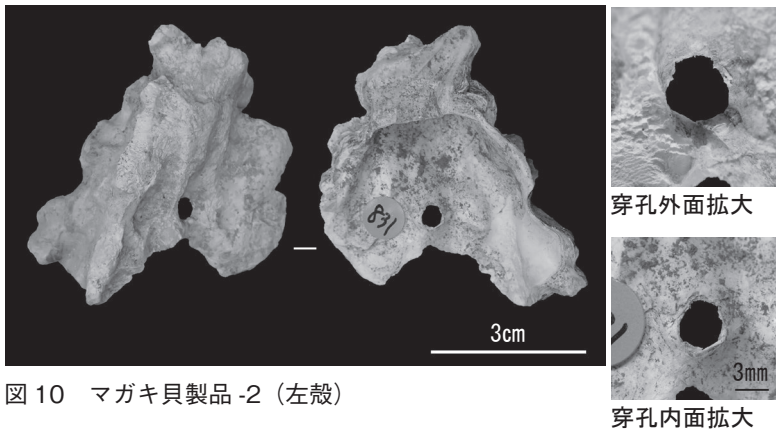


図10 マガキ貝製品-2 (左殻)

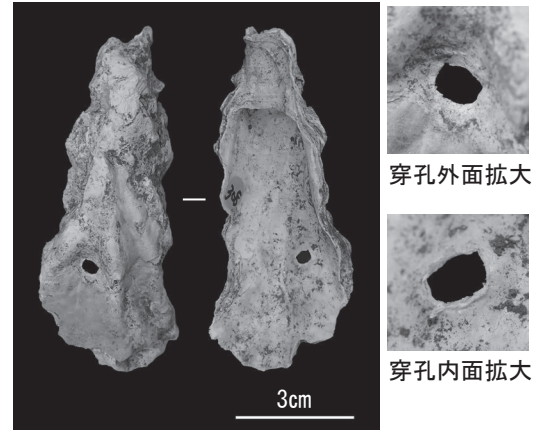


図11 マガキ貝製品-3 (左殻)

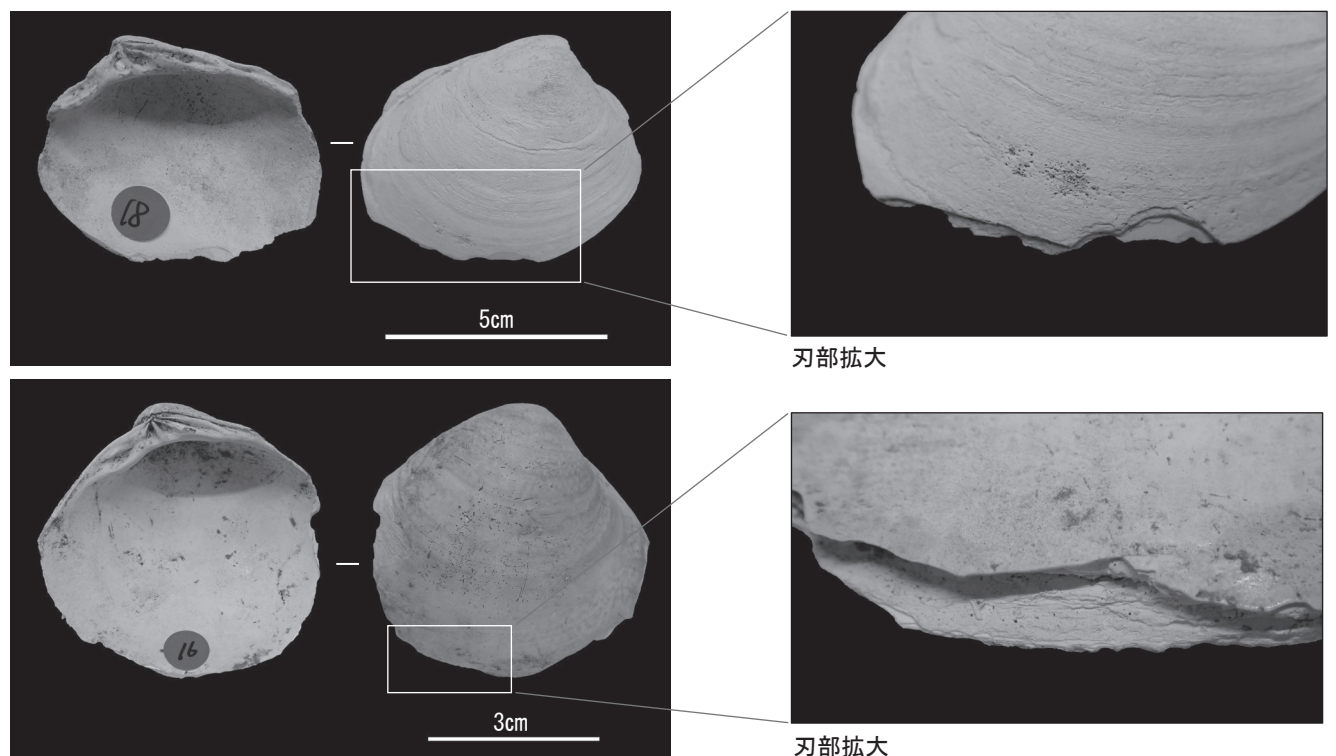


図12 赤羽台遺跡ハマグリ製貝刃-1 (右殻)・貝刃-2 (右殻)

弥生二丁目遺跡（弥生時代後期）

東京都文京区弥生二丁目、東京大学浅野キャンパス内に所在する（図1-②）。武蔵野台地縁辺部の標高約19mを測る舌状台地に位置している。1975年に東京大学理学部人類学教室と文学部考古学研究室によって発掘調査が実施され、断面が「V字状」と「逆梯形」を呈する2条の溝状遺構が検出された。これら溝状遺構は集落に伴う環壕と考えられており、貝層は溝状遺構内から検出された。弥生二丁目遺跡は、1884年に有坂鋳蔵が弥生土器を日本で初めて発見した向ヶ岡貝塚に該当する可能性が指摘されている（東京大学文学部考古学研究室編1979）。貝類遺体は保存部分を除きすべて採集されたと報告されているが（東京大学文学部考古学研究室編1979）、貝層の採集方法や篩を用いた水洗乾燥選別実施の有無は記載がなく不明である。

弥生二丁目遺跡から出土した貝類遺体は、東京大学文学部考古学研究室に保管されている。分類群や左右の分類はされていない状態で木箱に収納されていた。貝類遺体のほとんどは土が付いたまま保管されているが、ウミニナやウネナシトマヤなど小型の貝類遺体やマガキ破片など微細な資料も回収されていることから、篩を用いた乾燥選別が実施された資料である可能性が考えられる（図13）。貝層からは少量の骨片も出土しており「若干のシカ頭骨・顎骨の破片、長管骨破片と寛骨製卜骨1点・四肢骨骨幹部製卜骨1点、クロダイ顎骨破片1点」（東京大学文学部考古学研究室編1979）が報告されている。

貝類遺体については分類群と出土点数が報告されている（東京大学文学部考古学研究室編1979）。同定されている分類群は、腹足綱12種、二枚貝綱12種、計24種である。腹足綱のうち4種は人為的な利用が考え難い陸生巻貝である。出土点数は、マガキは左殻の点数、その他二枚貝綱の貝類は同定資料数を2で割った点数、計11,373点が記載されている。報告に基づいて作成した出土貝類組成では、マガキが88%を占めている（図14）。東京大学文学部考古学研究室編（1979）ではサイズや形態等についての記載がなく、掲載されている写真図版は古い調査のため不鮮明でスケールが無いことから、アカニシ、タニシ類、マガキ、ハマグリについて観察と計測を行った。

アカニシは殻頂から体層にかけて大きく打割されている個体が多い。残存している水管～軸部の計測値は50mm台～90mm台であった。欠損している部位を考慮すれば、殻高70mmから殻高100mm超の大型個体が多く採集されていたと考えられる（図15①②）。貝層からは打割された体層部の破片も確認された（図15③④）。アカニシの打割痕は、可食部を取り出すための調理痕と考えられる。焼けている個体は確認されなかった。

タニシ類は海産貝類に比べ殻が薄く脆弱であるため、遺跡から出土する個体は破損している場合が多いが、弥生二丁目遺跡では遺存状態の良い個体を確認された（図16）。殻径は約30mm～約50mmを測る。同じ巻貝でもアカニシとは産状が異なりほぼ完形を保っていることから、体層部は割られずに利用されたと考えられる。海産貝類と共に淡水産貝類であるタニシ類が出土する点は、当該地域の縄文時代貝塚ではほとんど見られない出土傾向で水田稲作との関わりが指摘されており（樋泉1991）、淡水域での貝類採集活動と淡水産貝類の利用を示唆する資料として注意される。

マガキは、赤羽台遺跡出土マガキのように縦方向に細長い個体もあれば、殻頂部が湾曲している個体、横方向に広がりをもつ個体などさまざまな形態が見られた。マガキは出土点数が多く左右が分類されていない状態で保管されていたため、スケールを添えた写真を撮影することでサイズの把握を行った（図16）。マガキ同士が固着した状態で出土している個体も散見され、弥生二丁目遺跡周辺にカキ礁の存在が窺える（図18）。

ハマグリでは計測可能であった個体について貝合わせを行い、1組が合併となった。合併にならなかった左右合計42点の殻長を計測した。殻長の最小は41.3mm、最大は112.0mm、平均は83.2mmであった。殻長分布



図 13 貝類遺体保管状況

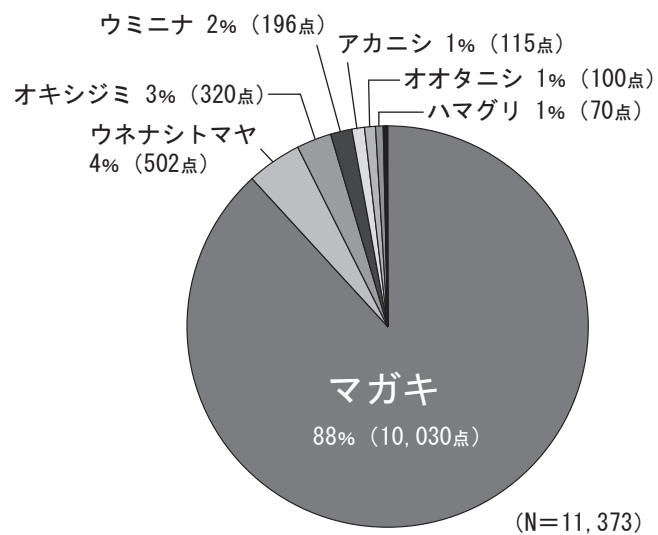


図 14 弥生二丁目遺跡出土貝類組成
(東京大学文学部考古学研究室編 (1979) より作成)

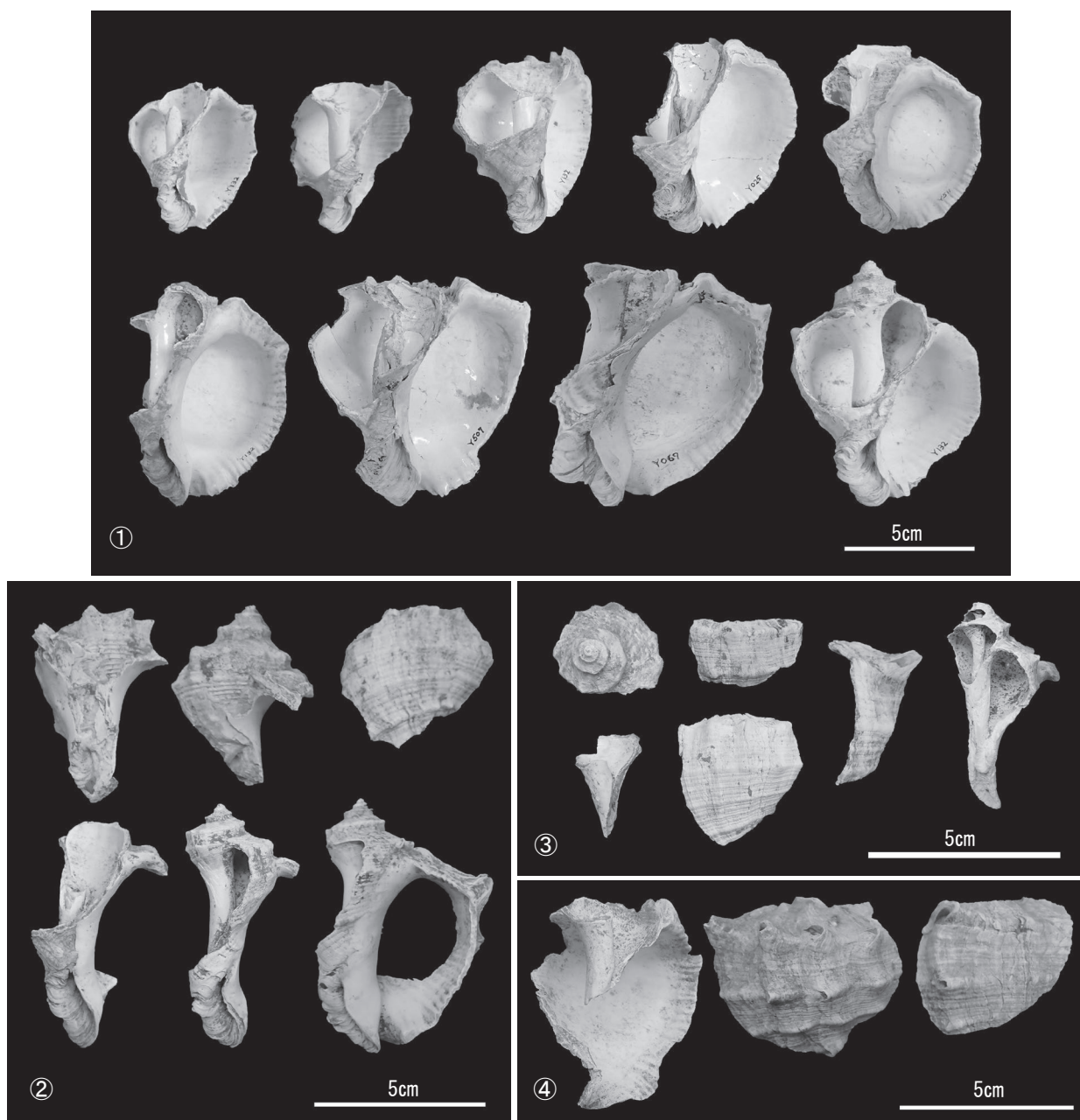


図 15 打割されているアカニシ

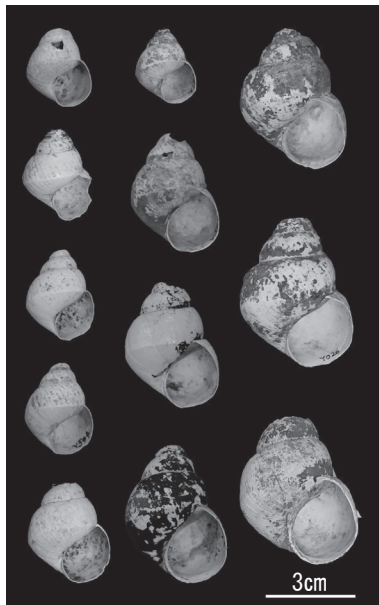


図 16 タニシ類



図 17 A-1 区出土マガキ左殻 (スケール 15cm)

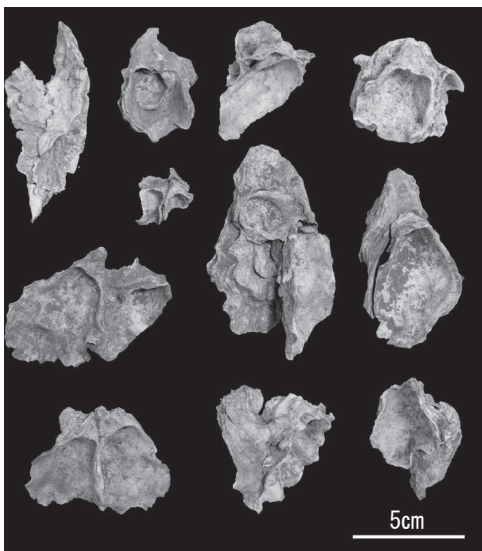


図 18 マガキ同士の固着

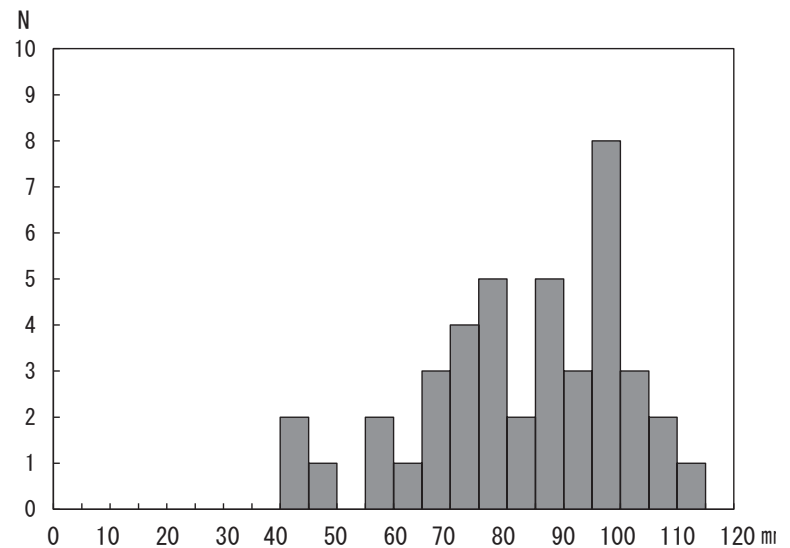


図 19 弥生二丁目遺跡ハマグリ殻長分布 (N = 42)

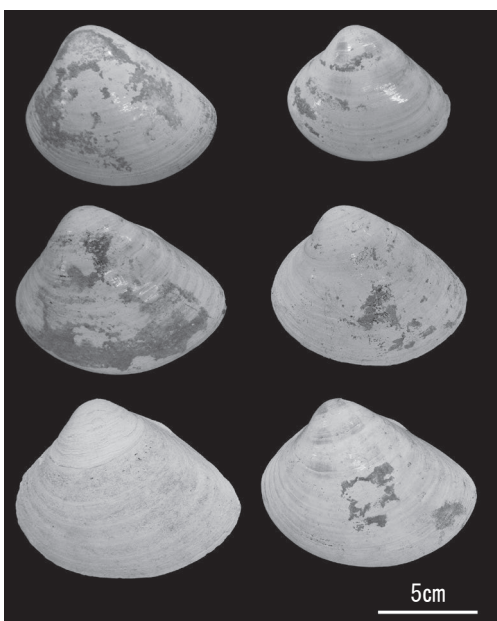


図 20 ハマグリ

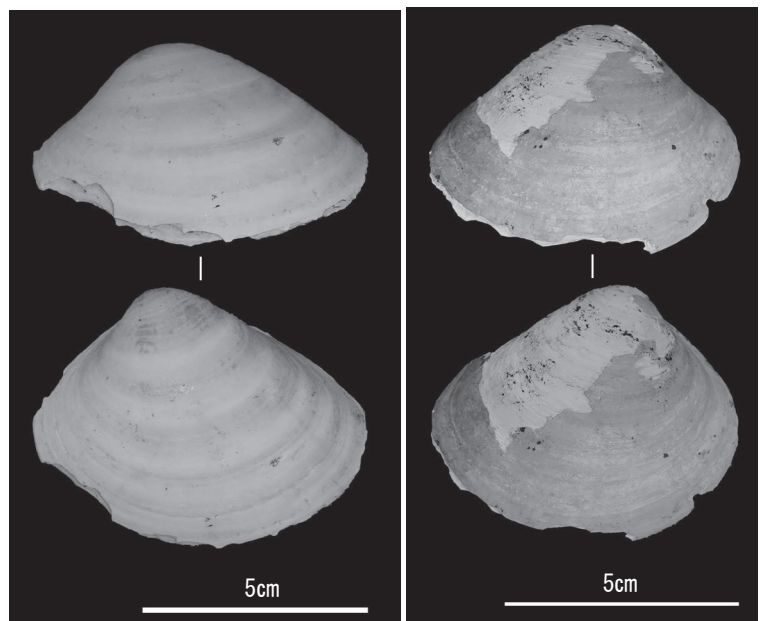


図 21 ハマグリ製貝刃 -1 (左殻)・貝刃 -2 (右殻)

は 75mm～90mm と 95mm～100mm にピークをもつ双峰型を呈する（図 19）。殻長 40mm 以下の個体は確認されておらず、大型個体を選択的に採集し遺跡に持ち込んでいたことが指摘される（図 20）。また、左殻 1 点、右殻 1 点を利用した計 2 点の貝刃が発見された（図 21）。いずれも腹縁の前縁から後縁の手前までの範囲に、外層を内面から連続して剥離し刃部を作出している。

諏訪下北遺跡（古墳時代前期）

神奈川県横浜市港北区箕輪町に所在する（図 1－⑥）。標高約 28m を測る下末吉台地上に位置している。開発に伴い 1986 年に発掘調査が実施された。弥生時代中期から古墳時代前期にかけて竪穴住居址 36 軒が検出されている。貝層は、胴張隅丸長方形、最大壁高 1.3m、規模は南北 7.6m × 東西 6.4m と推定される 18 号住居址の覆土から検出された（諏訪下北遺跡発掘調査団編 1990）。貝層が検出された「2 層」は焼土・炭化物が多く含まれており、大型コンテナ約 12 箱分の土器と共に「ハマグリ・アサリなどの貝類が大型コンテナに約 2 箱分出土した」と報告されている（諏訪下北遺跡発掘調査団編 1990）。貝層の採集方法や篩を用いた水洗乾燥選別実施の有無は記載がなく不明である。

諏訪下北遺跡から出土した貝類遺体は、（公財）横浜市ふるさと歴史財団埋蔵文化財センターに保管されている。水洗されており、分類群ごとに No. がふられたラベルと共にビニール袋に分けて収蔵されていた（図 22）。資料調査の結果、同定された分類群は腹足綱 3 種、二枚貝綱 8 種、計 11 種である。腹足綱ではオオタニシ 1 点・タニシ科 1 点・ホソウミニナ 5 点・アカニシ 3 点、二枚貝綱ではサルボオ 4 点、イガイ 1 点、マガキ 40 点、シオフキ 105 点、ヤマトシジミ 102 点、カガミガイ 7 点、アサリ 2 点、ハマグリ 1,153 点、同定資料数にして計 1,424 点を数えた（表 2）。最小個体数に基づいて作成した出土貝類組成ではハマグリが 80% を占めており、ハマグリを集約的に採集していたことが指摘される（図 23）。シオフキ・ヤマトシジミを伴うことから、諏訪下北遺跡周辺には汽水域から内湾砂泥底の潮間帯の存在が窺え、主たる貝類採集域であったことが推察される。ヤマトシジミとシオフキについては貝合わせを試みたが、合弁となったのはヤマトシジミ 3 組、シオフキ 1 組と少なかった。合弁個体が少ないことは、採集されてから住居址内に投棄されるまでの過程において、左右の殻がばらばらになる何等かの営為があったことが推察される。

ハマグリ左殻 273 点、ヤマトシジミ右殻 48 点の殻長を計測し、殻長分布を示した（図 24、図 25）。ハマグリは殻長の最小は 30.5mm、最大は 85.0mm、平均は 47.8mm であり、殻長 35mm～50mm にピークが見られた。殻長 30mm 以下の小型個体は確認されなかった。ヤマトシジミの殻長の最小は 23.0mm、最大は 39.5mm、平均は 29.6mm であった。殻長 25～30mm にピークが見られた。ハマグリをはじめとするほぼすべての分類群に、焼けたことによって生じた殻のひび割れ、外層の剥離、殻の色調が灰色に変色している個体が観察された（図 26）。貝層が検出された層位は「焼土・炭化物が多く含まれていた」（諏訪下北遺跡発掘調査団編 1990）と報告されており、貝類遺体の産状とも関連性があると考えられる。ハマグリでは、右殻を利用した貝刃 1 点が発見された（図 27）。腹縁の中央部に、外層を内面から剥離し刃部を作出している。シオフキでは、有孔貝製品と呼ばれる殻頂部に丸く穴が開けられた個体が 2 点発見された（図 28）。

上台北遺跡（弥生時代後期）

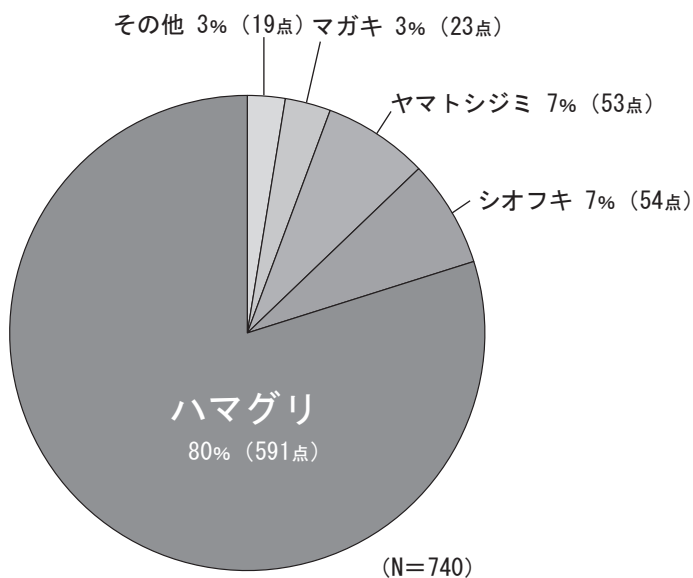
神奈川県横浜市鶴見区上末吉に所在する（図 1－⑦番号）。標高約 35m の下末吉台地上に位置している。神奈川県重要文化財に指定されている人面付壺形土器（弥生時代後期）が、1958 年に発見されたことで知られている。1978 年の鶴見区史刊行委員会による調査では、縄文時代中期と弥生時代後期の住居址が確認

表2 諏訪下北遺跡出土貝類遺体集計表

分類群	袋No.	No.①	No.②	No.③	No.④	No.⑤	No.⑥	No.⑦	No.⑧	No.⑨	No.⑩	No.⑪	No.無	計
オオタニシ			1											1
タニシ科							1							1
ホソウミニナ			1	2			2							5
アカニシ			1											1
	焼け			1					1					2
サルボオ	L				1							1		2
	L焼け			2										2
イガイ	R	1												1
マガキ	L	3	6	3	4	3	1			2	1			23
	L焼け	1												1
	R	1		3	1	5	1			1				12
	R焼け	2		1	1									4
シオフキ	L		9	10	2	8	10		2	2	1	2	6	52
	L焼け				1									1
	L有孔		1											1
	R		6	14	2	2	5		1	4	4	1	6	45
	R焼け				1	1	1							3
	R有孔		1			1						1		3
ヤマトシジミ	L		18	18	3	2	3			3				47
	L焼け			1			1							2
	R		18	14	4	5	9			2		1		53
カガミガイ	L			1										1
	R	1			1		1		1		1			5
	破片焼け			1										1
アサリ	L								1					1
	R								1					1
ハマグリ	L	30	70	72	40	63	88	47	51	30	27	6		524
	L焼け	7	5	6	2	4		5	3	5		1		38
	R	46	103	64	48	42	88	39	42	31	25	14		542
	R焼け	4	5	13	2	1		8		11	1	3		48
	R貝刃						1							1
		96	245	226	113	137	212	99	103	91	60	30	12	1424



図22 貝類遺体保管状況



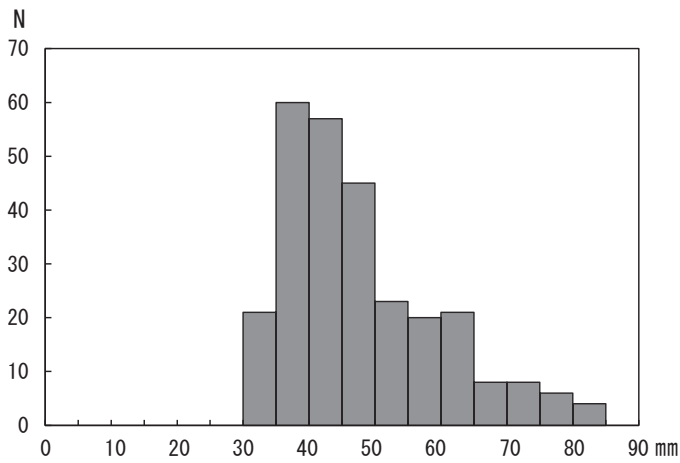


図 24 諏訪下北遺跡ハマグリ殻長分布 (N = 273)

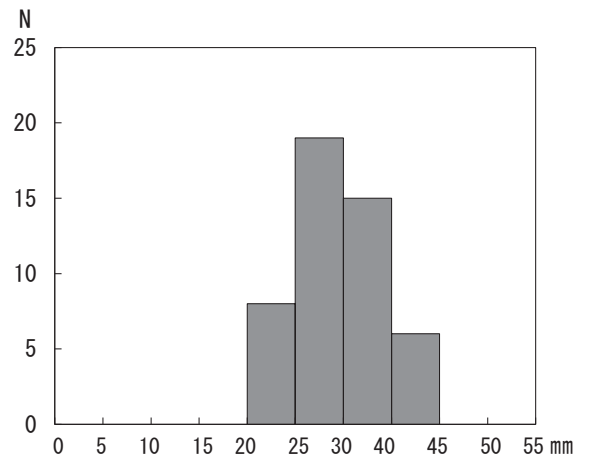


図 25 諏訪下北遺跡ヤマトシジミ殻長分布 (N = 48)

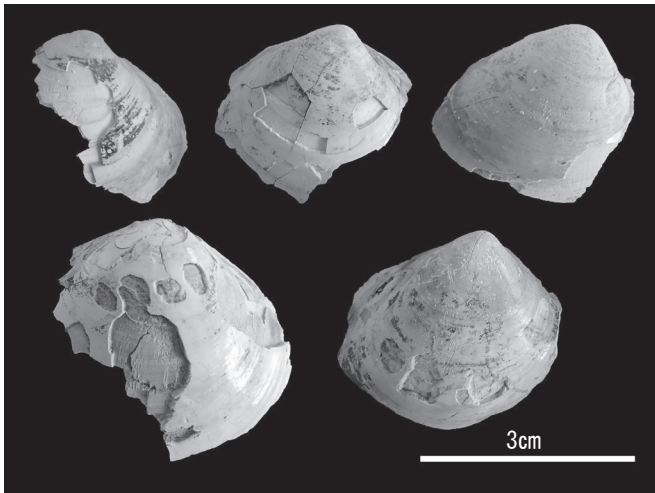


図 26 焼けているハマグリ

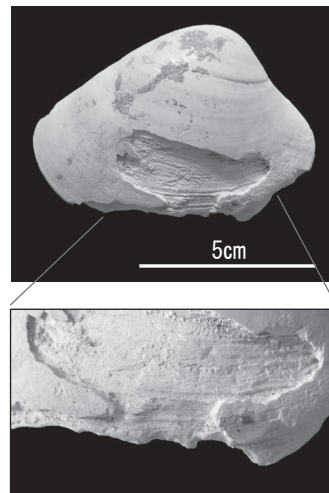


図 27 ハマグリ製貝刃（右殻）

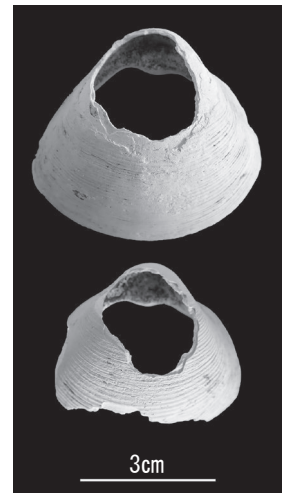


図 28 シオフキ有孔貝製品

表 3 上台北遺跡出土貝類遺体集計表

区画		1区	2区	3区	4区	計
分類群						
スガイ	蓋			2	1	3
アワビ類	破片			2		2
イボキサゴ		34	4	19	9	66
タニシ科		1		1	1	3
イボウミニナ				1		1
ウミニナ			3	8	5	16
タマキビ				2		2
オオヘビガイ		1		2	1	4
アカニシ		1	2	5	1	9
	焼け		1	1		2
	破片			1		1
アラムシロ			1		1	2
キセルガイ科					1	1
計		37	11	44	20	112

区画		1区	2区	3区	4区	計
分類群						
マガキ	L	429	606	657	418	2110
	R	415	368	490	630	1903
	R製品			1		1
ナミマガシワ	R			2		2
ウネナシトマヤ	L	1	1	2	6	10
	R	1	1	3	2	7
オオノガイ	L			1		1
	R	1			1	2
シオフキ	L		2	7	3	12
	R		3	2	5	10
ヤマトシジミ	R焼け		1			1
カガミガイ	破片			1		1
アサリ	L			2		2
	破片				1	1
ハマグリ	L	117	264	291	219	891
	L焼け	2	7	6	2	17
	R	118	304	338	175	935
	R製品	4	2	1	2	9
オキシジミ	L				1	1
計		1088	1559	1804	1465	5916

された。同台地上では縄文時代から古墳時代にわたる遺構が確認されており、下末吉遺跡・上台遺跡・上台北遺跡と呼び分けられてきた学史的経緯があるが、現在は「上台遺跡」として総称されている（高橋 2019）。本稿において資料調査対象とした地点は、2000 年に横浜市消防局の震災対策用防火水槽設置工事に伴い「上台北遺跡」として発掘調査が実施された地点である。弥生時代後期の 2 号住居跡から貝層が検出された。貝層の厚さは約 20cm、範囲は 1.3 × 1.0m である。持ち帰った貝層からは、フルイがけによってガラス小玉 1 点が発見されたという（財団法人横浜市ふるさと歴史財団埋蔵文化財センター編 2001）。発掘調査報告書は刊行されていないが、出土した貝類遺体の写真が財団法人横浜市ふるさと歴史財団埋蔵文化財センター編（2001）に掲載されている。掲載されている分類群は、写真の凡例によると「マガキ・ハマグリ・カリガネエガイ・シオフキ・アカニシ・ウミニナ・ムシロガイ・イボキサゴ・フジツボ」の 9 種である。

上台北遺跡から出土した貝類遺体は、（公財）横浜市ふるさと歴史財団埋蔵文化財センターに保管されている。取り上げ区画のラベルが付され分類群ごとビニール袋に分けて収蔵されていた（図 29）。貝層から出土した弥生時代後期の土器も確認された（図 30・土器の時期は古屋紀之氏（公益財団法人横浜市ふるさと歴史財団埋蔵文化財センター）のご教示による）。資料調査の結果、同定された分類群は腹足綱 12 種、二枚貝綱 10 種、計 22 種である。フジツボ類も出土しているが破片資料であるため表 3 では計数していない。腹足綱ではスガイ 3 点・アワビ類 2 点・イボキサゴ 66 点・タニシ科 3 点・コオロギ 1 点・イボウミニナ 1 点・ウミニナ 16 点・タマキビ 2 点・オオヘビガイ 4 点・アカニシ 12 点・アラムシロ 2 点・キセルガイ科 1 点、二枚貝綱ではマガキ 4,014 点、ナミマガシワ 2 点、ウネナシトマ 17 点、オオノガイ 3 点、シオフキ 22 点、ヤマトシジミ 1 点、カガミガイ 1 点、アサリ 3 点、1,852 点、オキシジミ 1 点、同定資料数にして計 6,029 点を数えた（表 3）。財団法人横浜市ふるさと歴史財団埋蔵文化財センター編（2001）に掲載されていた「ムシロガイ」「カリガネエガイ」はそれぞれ「アラムシロ」「ウネナシトマヤ」に再同定し、新たに 13 種を記載することができた。

最小個体数に基づいて作成した出土貝類組成では、マガキが 66%、次いでハマグリが 30% を占めていた（図 31）。イボキサゴもややまとまって出土している。ウネナシトマヤなど内湾潮間帯に生息する貝類は、主体を占めるマガキに伴って遺跡に持ち込まれたものと考えられることから、マガキとハマグリの 2 種を主に採集していたことが指摘される。

貝類組成において特筆されるのは、アワビ類の破片 2 点が含まれていた点である（図 32、図 33）。アワビ類の生息域は外洋に面した潮下帯～上部浅海帯の岩礁であり、上台北遺跡周辺には生息していなかった分類群であると考えられる。よって、三浦半島などアワビ類の生息域である東京湾湾口部岩礁域において採集された個体が搬入されたものと推察される。三浦半島南端部に分布する同時代の海蝕洞窟遺跡群からは、アワビ類を素材とした貝包丁や貝鏃といった貝製品・未成品が多く出土することから、上台北遺跡から出土したアワビ類破片も何等かの貝製品もしくは未成品である可能性も考えられる。

アカニシは欠損のため計測可能な個体はなかったが、採集されていたサイズは殻高 70mm 程の個体が多かったと考えられ、殻高 100mm を測るような大型個体は見られなかった（図 34）。マガキの形態は、殻長と殻高の比が 1:2 を呈する個体が多く、細長い個体や湾曲した個体は少ない（図 35、図 36）。マガキ右殻 556 点の殻高、ハマグリ左殻 474 点の殻長を計測した（図 37、図 38）。マガキ殻高の最小は 13.2mm、最大は 96.2mm、平均は 55.1mm であり、殻高 55mm～60mm にピークが見られた。ハマグリ殻長の最小は 24.5mm、最大は 77.6mm、平均は 41.9mm であった。殻長 35mm～45mm にピークが見られ、殻長 60mm 以上の大型個体は少ない。

マガキとハマグリでは、貝製品が発見された。マガキでは、右殻中央部に径約 4.2mm の穿孔が 2 箇所並ん



図 29 貝類遺体保管状況

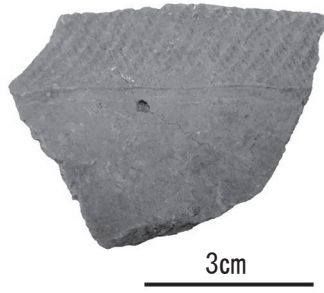


図 30 貝層に伴う土器

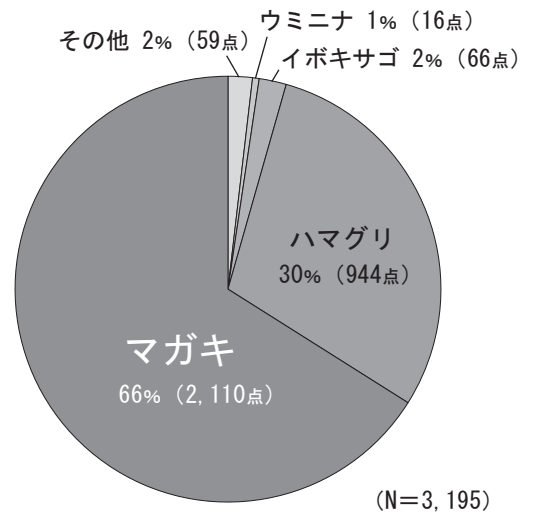


図 31 上台北遺跡出土貝類組成

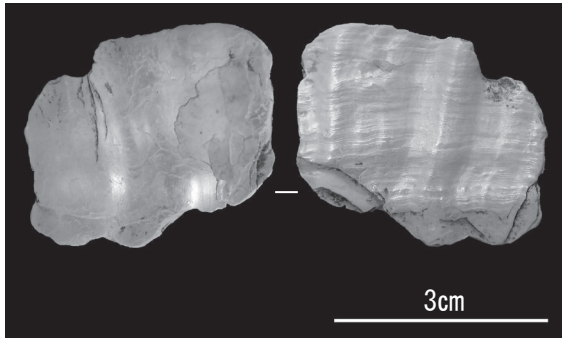


図 32 アワビ類破片 -1

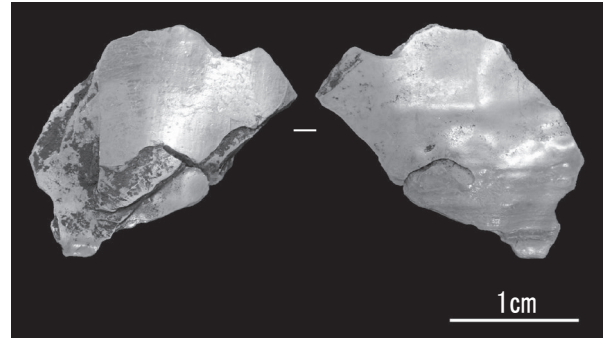


図 33 アワビ類破片 -2



図 34 アカニシ

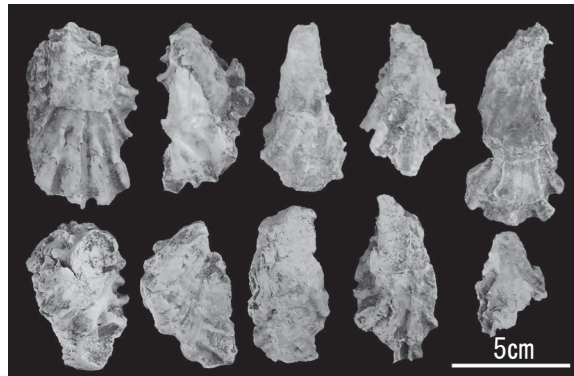


図 35 マガキ左殻

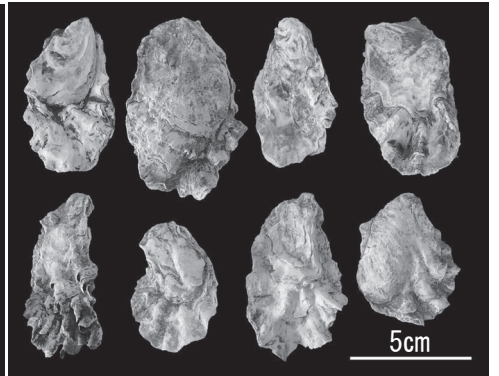


図 36 マガキ右殻

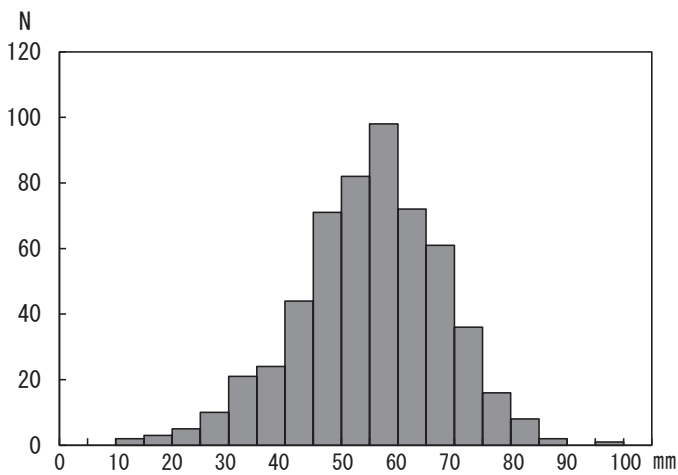


図 37 上台北遺跡マガキ殻高分布 (N = 556)

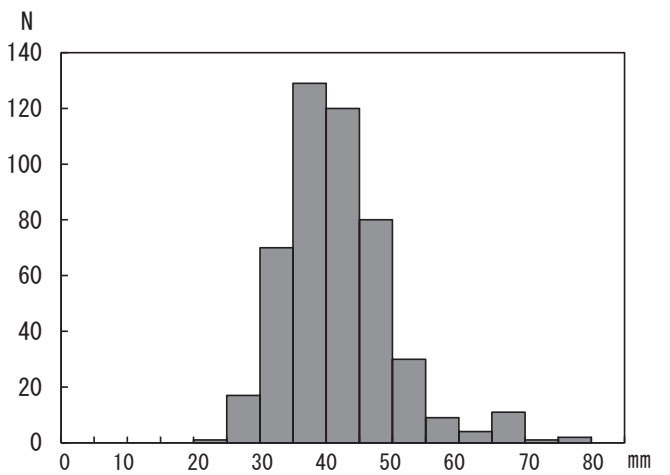


図 38 上台北遺跡ハマグリ殻長分布 (N = 474)

で施された貝製品 1 点が確認された (図 39)。器種は不明である。ハマグリでは、右殻を利用した貝刃 2 点が確認された。貝刃 -1 は殻長 84.9mm を測る。上台北遺跡から出土したハマグリの中では大型の個体を利用している。腹縁の中央部から後縁の範囲に、外層を内面から剥離し刃部を作出している。遺存状態が良好であったため、使用痕と考えられる剥離痕や細かい傷が外面に観察された。刃部内面にも使用痕と考えられる擦痕や傷が観察された (図 40 ①)。外面の殻頂部から中央部の範囲には、長さ 1mm～3mm 程の直線的な傷が多数認められた (図 40 ②)。図 40 ③では、多数の細かい傷によって外面が磨り減っていることがわかる。硬質で堅牢であるハマグリの外面全体に観察された多数の傷や磨耗は、貝刃の用途・機能を考えるうえで重要な所見である。貝刃 -2 は殻長 33.3mm であり、貝刃 -1 や他の遺跡で発見されたハマグリ製貝刃と比較して小型の個体が利用されている (図 41)。貝刃の素材として選択される個体が大型個体に限らないことを示す資料として注目に値する。腹縁の中央部に、外層を内面から剥離し刃部を作出している。波状の刃部がほぼ等間隔に作出されている点が特徴的である。外面に貝刃 -1 に見られたような傷や磨耗は認められない。

三殿台遺跡 (弥生時代中期後半)

神奈川県横浜市磯子区岡村に所在する (図 1 - ⑩番号)。1961 年に発掘調査が行われ、1966 年に国指定史跡となった学史的にも著名な遺跡である。1967 年には三殿台考古館が開館し遺跡公園となっている。標高約 55m を測る台地の平坦部に、縄文時代中期から古墳時代にかけて断続的に集落が営まれたことが明らかとなっている。弥生時代の貝層は、360C 号住居址の柱穴 (弥生時代中期後半) から検出された。360C 号住居址は幅の広い小判形を呈し、長径 13.7m・短径 11.8m を測る。床面が一面に焼けていることから焼失住居であると考えられている。貝層の採集方法や篩を用いた水洗乾燥選別実施の有無は記載がなく不明である。貝層からはシカ・イノシシも出土しており、動物遺体の内容は金子・中村 (2011) によって報告されている。

三殿台遺跡から出土した貝類遺体は、横浜市三殿台考古館に保管されている (図 42)。金子・中村 (2011) によれば、腹足綱はツメタガイ 2 点・アカニシ 68 点、二枚貝綱はハイガイ 1 点・マガキ 734 点・アサリ 339 点・ハマグリ 352 点・シオフキ 3 点・オオノガイ 3 点、同定資料数にして計 1,562 点が同定されている。金子・中村 (2011) に基づき最小個体数を用いて作成した出土貝類組成では (註 1)、マガキが 50% を占めており、次いでハマグリ 21%、アサリ 20% であった (図 43)。三殿台遺跡では、特定の分類群に偏らない貝類組成が特徴である。

アカニシはまとまった点数が出土しているが、打割されている個体が多く計測可能な個体は多くなかった。そのため、水管から遺存している螺塔までの長さを計測し出土サイズの把握に努めた (図 44)。最小は 40mm、最大は 118.3mm、平均は 91.2mm であった。殻高 95mm～100mm にピークが見られ、殻高 100mm 前後の大型個体を選択的に採集していたことが指摘される。焼けて外面に剥離や灰色の変色が生じている個体も観察された (図 45)。アカニシの多くは殻頂から体層にかけて大きく打割されており (図 46)、可食部を取り出すための調理痕と考えられる。打割された体層の破片も確認されており、1 点のみであるがオオヘビガイが固着している破片が観察された (図 47)。

マガキは調査時間の都合上計測を実施できなかったが、殻高 50mm～70mm 程の個体が多く、形態は殻長と殻高の比が 1:1 もしくは 1:2 を呈する個体が多かった。細長い個体や著しく湾曲した個体は少ない (図 48、図 49)。ハマグリ左殻 57 点、アサリ左殻 50 点の殻長を計測した (図 50、図 51)。ハマグリ殻長の最小は 39.3mm、最大は 84.9mm、平均は 60.9mm であった。殻長 60mm～65mm にピークが見られた。アサリ殻長の最小

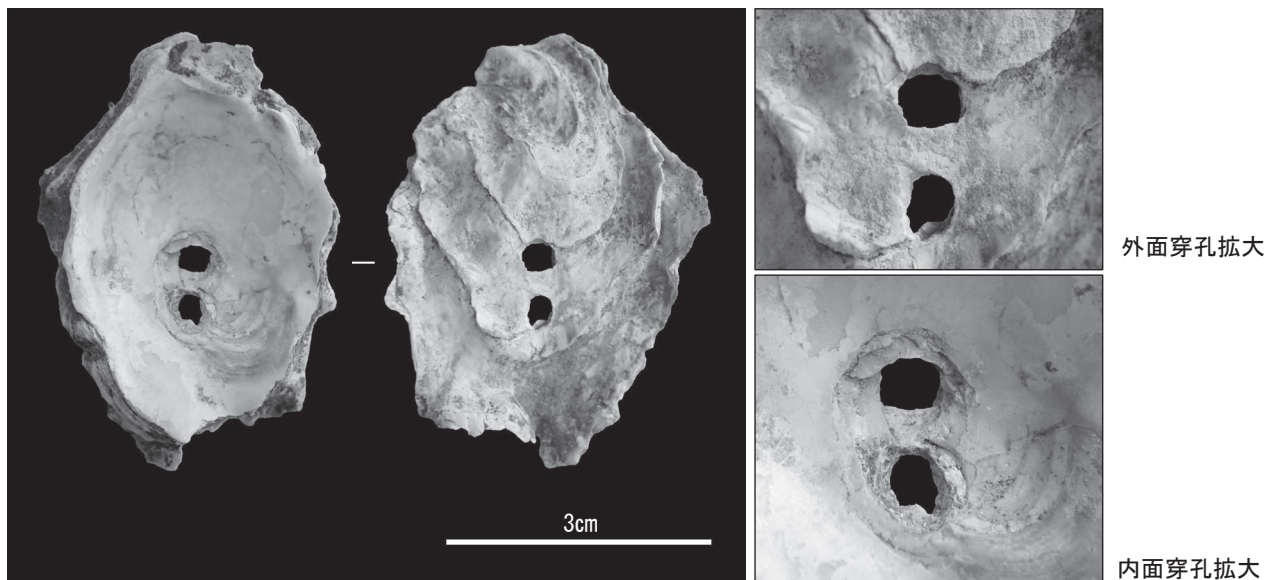


図 39 マガキ貝製品

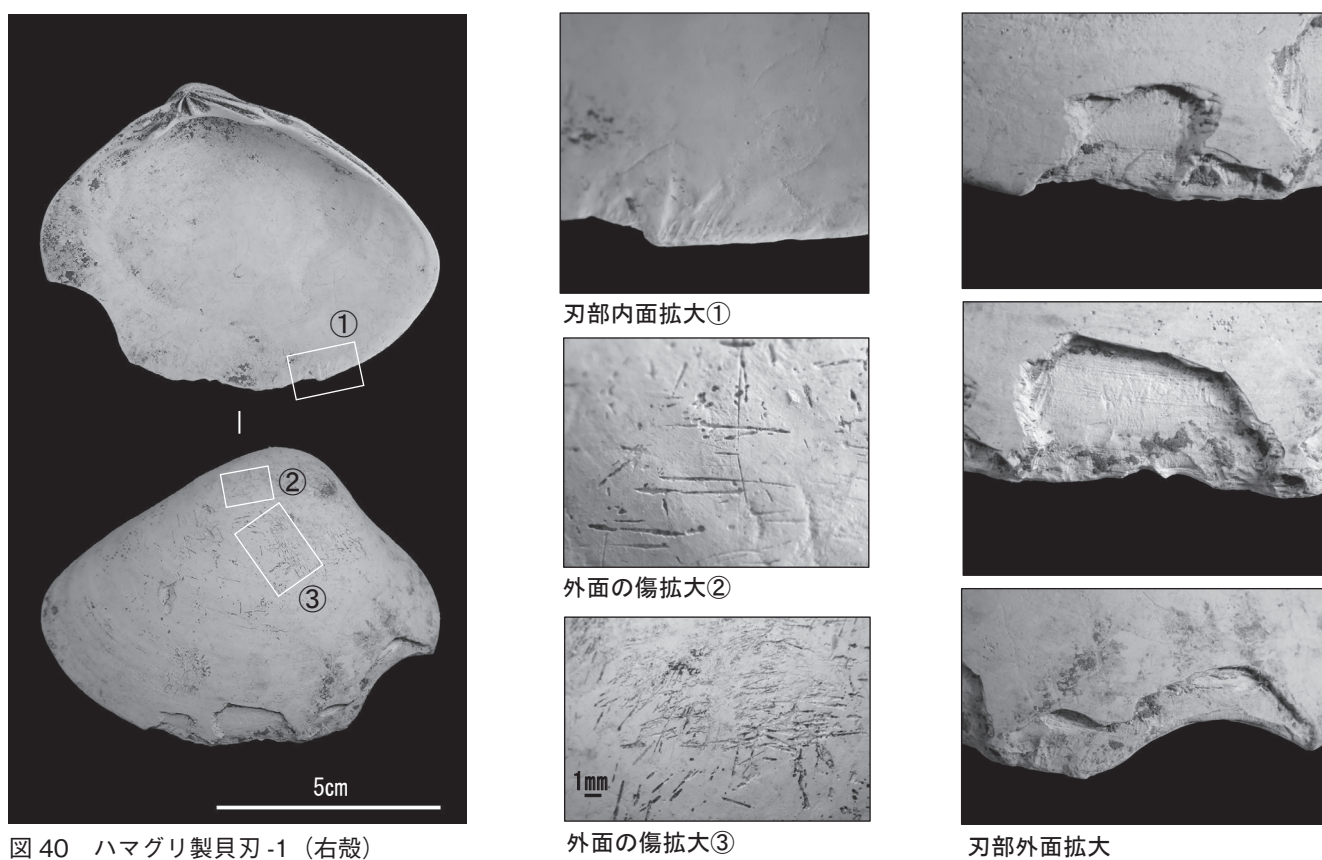


図 40 ハマグリ製貝刃 -1 (右殻)

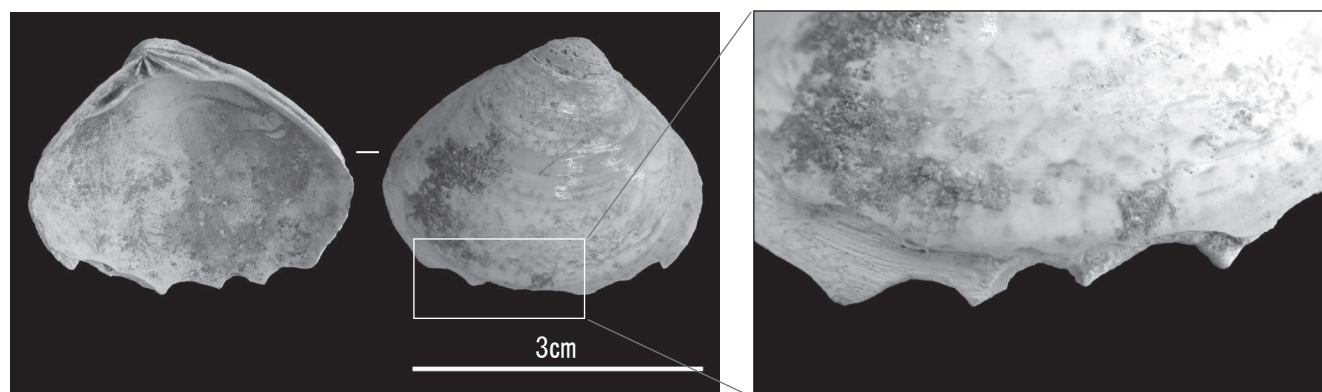


図 41 ハマグリ製貝刃 -2 (右殻)



図 42 貝類遺体保管状況

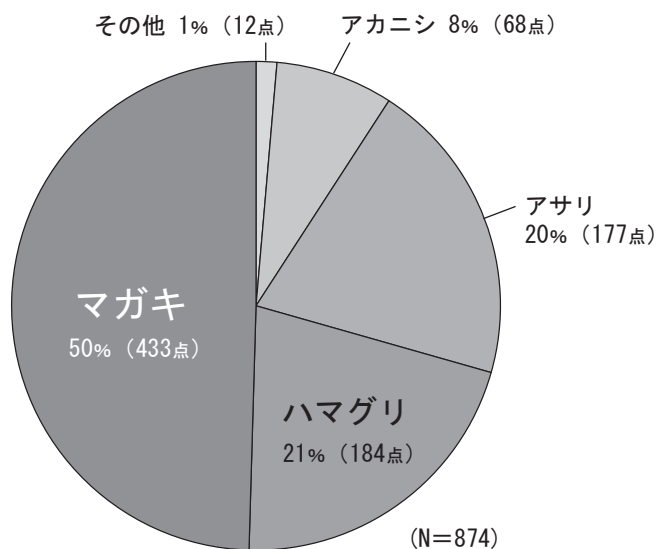


図 43 三殿台遺跡出土貝類組成
(金子・中村 (2011) より作成)

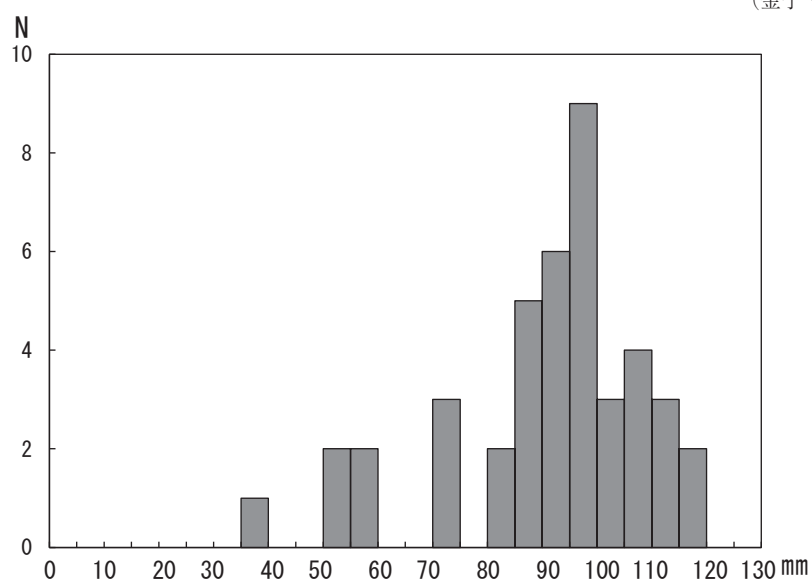


図 44 三殿台遺跡アカニシ殻高分布 (N = 42)

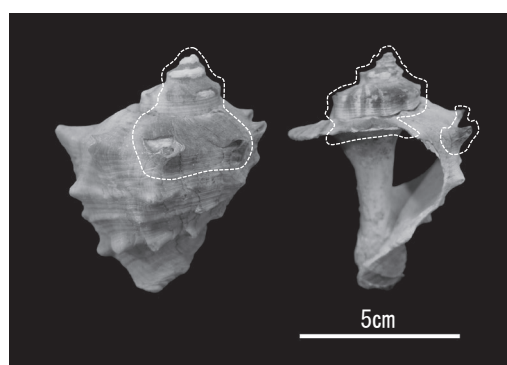


図 45 焼けアカニシ
(点線内が焼けている範囲)

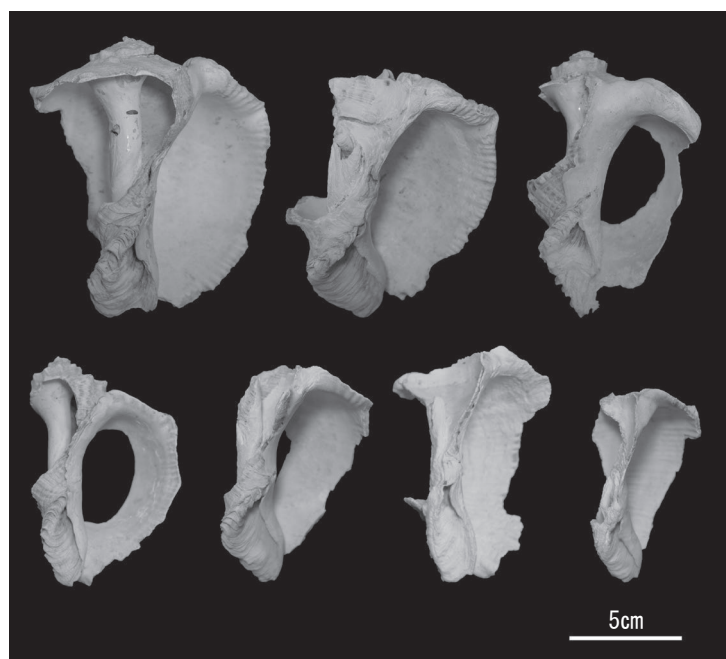


図 46 殻頂や体層が打割されているアカニシ

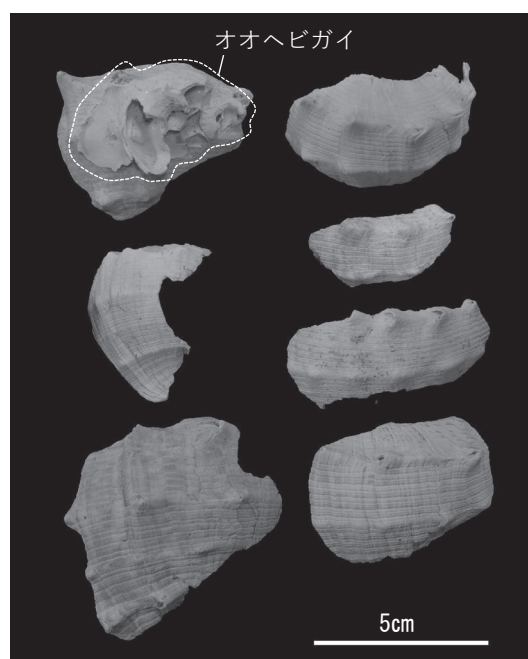


図 47 打割されたアカニシ体層破片

は 34.6mm、最大は 52.1mm、平均は 44.5mmであった。殻長 40mm～50mmにピークが見られた。

ハマグリでは、左殻を利用した貝刃 1 点、右殻を利用した貝刃 1 点、計 2 点が発見された（図 52、図 53）。貝刃 -1 は腹縁の後縁～中央部の範囲に、貝刃 -2 は腹縁中央部に外層を内面から剥離し刃部を作出している。貝刃 -2 では、外面に同じ方向に直線的な傷が複数観察された（図 53 拡大）。

註 1：金子・中村（2011）では、ハイガイ左殻 1 点・カガミガイ 0 点・オオノガイ左殻 3 点と報告されているが、筆者が行った資料調査ではハイガイ右殻 2 点・カガミガイ左殻 1 点・オオノガイ左殻 5 点・右殻 2 点を確認した。図 43 は資料調査で確認された貝類遺体の最小個体数を加えて作成したものである。

間口洞窟遺跡（弥生時代中期～後期）

間口洞窟遺跡は、神奈川県三浦市南下浦町松輪に所在する（図 1 - ⑮）。標高 5.5m に位置する海蝕洞窟遺跡であり、弥生時代から近世にかけて利用されたことが明らかとなっている。神奈川県立博物館（現・神奈川県立歴史博物館）が第 1 次調査（1971 年）、第 2 次調査（1971 年）、第 3 次調査（1972 年）、第 4 次調査（1972 年）、第 5 次調査（1973 年）の計 5 次にわたる学術調査を行った（神奈川県立博物館 1972、1973、1974、1975）。洞窟内に形成された貝層からは、外洋性漁撈に伴うと考えられる鹿角製銚頭・釣針等の漁撈具、大型アワビ類を素材とした貝包丁、オオツタノハ製貝輪等の貝製品、祭祀儀礼に伴うト骨といった多様な骨角貝製品が良好な遺存状態で多数出土している。しかし、貝層から出土した動物遺体については定性的な報告であったため詳細は不明であった。そのため、筆者は再整理と資料調査を実施し、動物遺体の概要を吉永（2022）、魚類遺体の報告を吉永（2023）に報告した。本稿では貝製品の資料調査成果を中心に報告する。貝層の採集方法や篩を用いた水洗乾燥選別実施の有無は記載がなく不明である。間口洞窟遺跡から出土した動物遺体は、神奈川県立歴史博物館に保管されている。

間口洞窟遺跡に形成された弥生時代の貝層は、弥生時代中期の 10 層・11 層と弥生時代後期の 8 層である。貝類遺体は、同定資料数にして 10 層・11 層では 16,227 点、8 層では 547 点、計 16,764 点を数え、計 63 種の分類群を同定した。10 層・11 層と比較し 8 層の同定資料数が少ないのは、8 層は後世の大きな攪乱を受けているためである。従って、貝類遺体をもとに中期と後期の貝類採集活動を単純に比較することは難しい。

間口洞窟遺跡では、アワビ類において完形個体が非常に少なく、破片が多量に出土した点が特筆される。アワビ類破片を資料化するため、貝包丁などアワビ類製貝製品も含めて「アワビ類破片」として計数した。ハマグリはほとんどが貝刃として出土したため、未加工のハマグリと併せて「ハマグリ」として計数した。出土貝類組成は、最小個体数ではなく同定資料数に基づき作成した（図 54・図 55）。10 層・11 層ではスガイが 49%と半数を占め、イシダタミ、クボガイ、サザエ、バテイラなど潮間帯～潮下帯の岩礁域に生息する巻貝が 88%以上を占めている点が特徴である。特に、スガイ、イシダタミなど殻高 20mm前後の小型巻貝が大量に出土した。これら外海岩礁性群集の貝類は、間口洞窟遺跡周囲の岩礁域に群生していたと考えられる。8 層ではアワビ類が 38%と多くを占めるが、攪乱による影響が大きい点を考慮すれば外海岩礁性群集が大半を占める 10 層・11 層の貝類組成と大差はないと考えられる。

先に述べた通り、間口洞窟遺跡ではさまざまな貝製品が報告されている。しかし、これまで報告されているのは出土した貝製品および未成品の一部であるため、貝類遺体の悉皆的な再観察を行った。結果、多種多様な貝製品および未成品を抽出することができた。弥生中期では 518 点、弥生後期では 262 点、計 780 点を

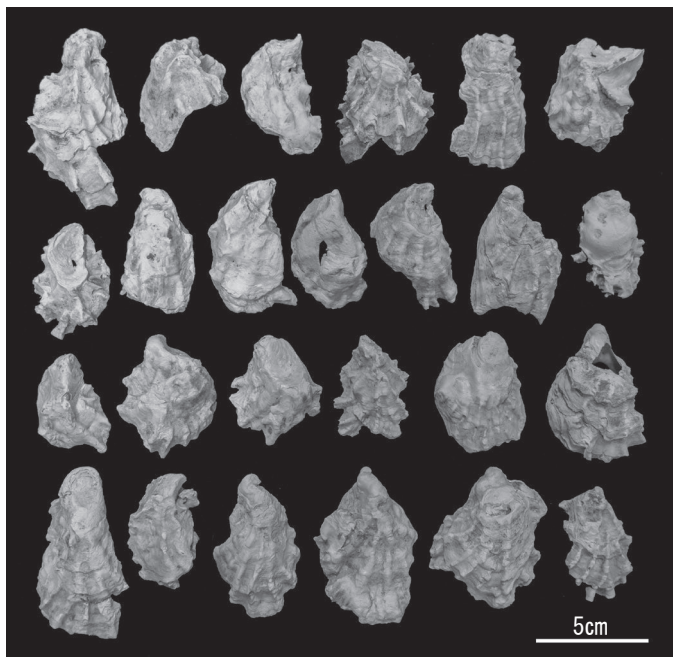


図 48 マガキ左殻

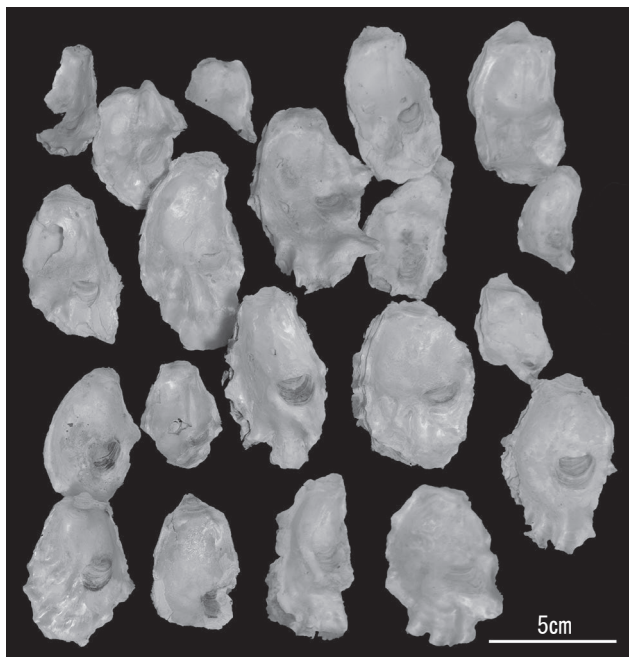


図 49 マガキ右殻

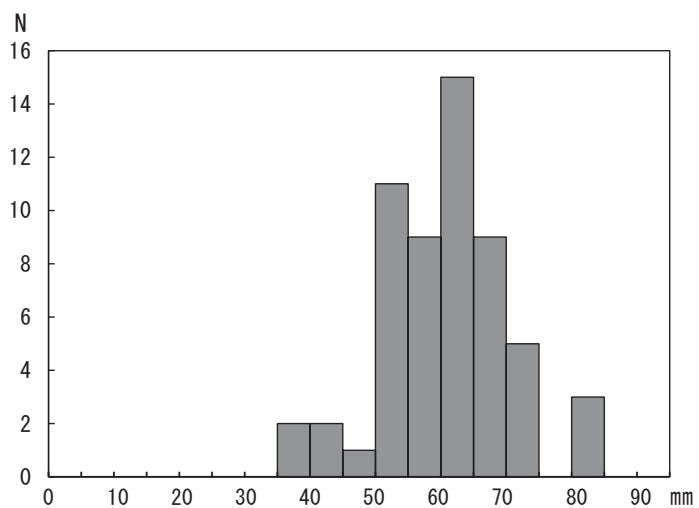


図 50 三殿台遺跡ハマグリ殻長分布 (N = 57)

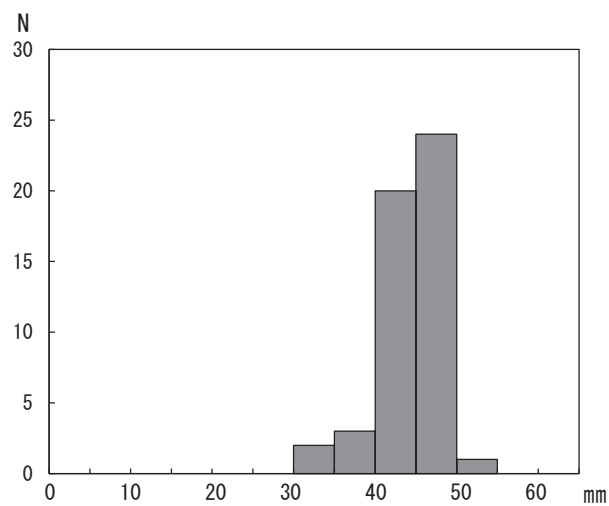


図 51 三殿台遺跡アサリ殻長分布 (N = 50)

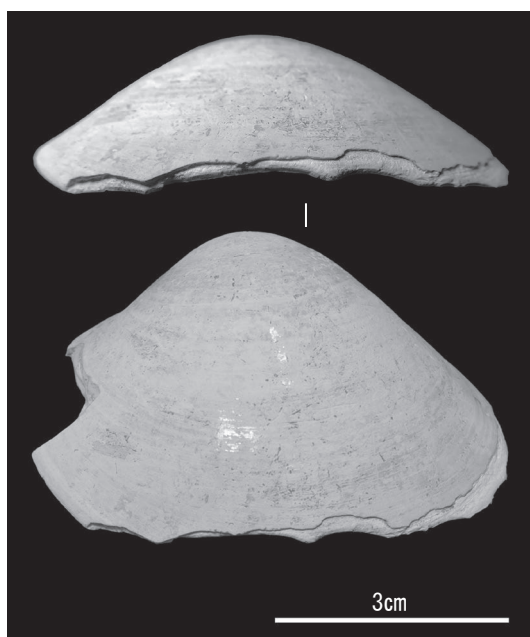


図 52 ハマグリ製貝刃 -1 (左殻)

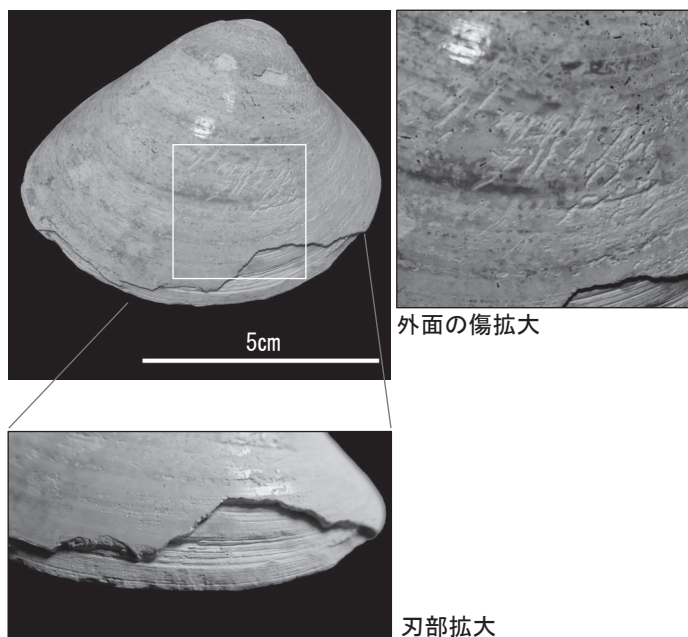


図 53 ハマグリ製貝刃 -2 (右殻)

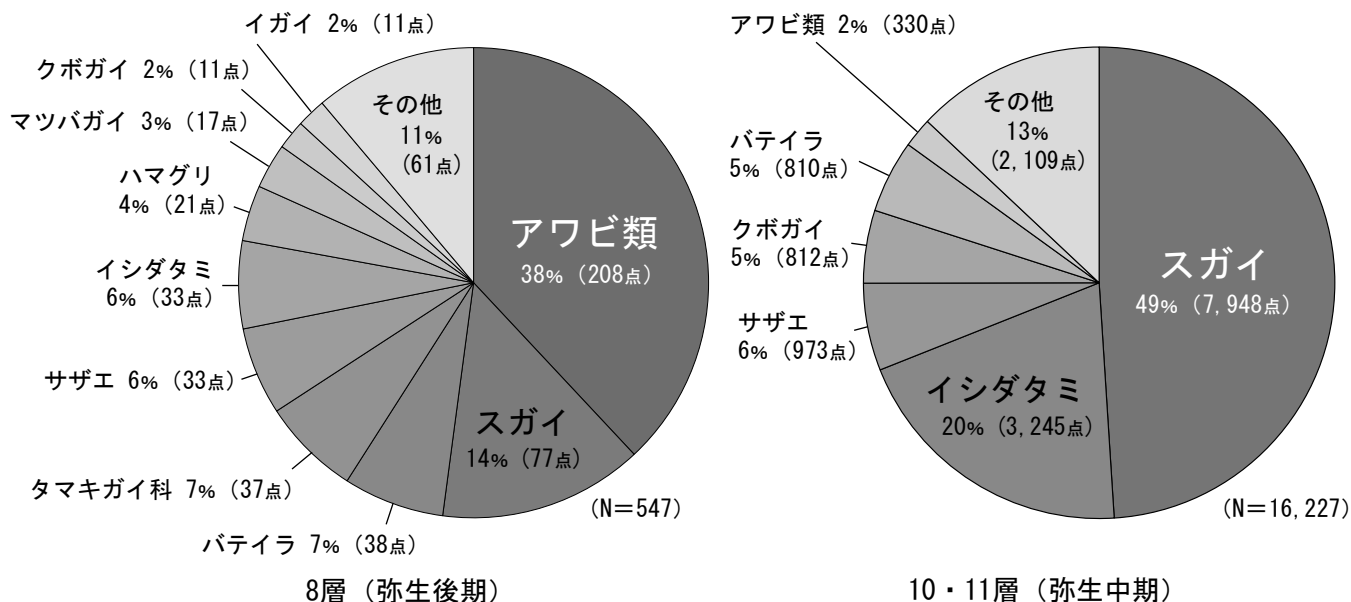


図 54 間口洞窟遺跡出土貝類組成（吉永 2022 より作成）

表 4 間口洞窟遺跡出土貝製品および未成品集計表

器 種		出土位置 分類群		弥生時代 中 期								弥生時代 後 期				計	
				11層				10層				不明	8層				
				← 開口部		奥部 →		← 開口部		奥部 →			← 開口部		奥部 →		
				0区	I 区	II 区	III 区	I 区	II 区	III 区	0区		I 区	II 区	III 区		
利 器	貝 鋏 貝包丁 および 未成品	アワビ類	完形										3	5	8		
			殻頂部							4			2		6		
			貝包丁を 含む破片		1	6	1	153	48	116		47	81	62	5	520	
		アワビ類製貝鋏							1			2			3		
	貝 鋸	イトマキボラ科製貝鋸								2					2		
	貝 刃	シラトリモドキ製貝刃	L				1									1	
			R								1					1	
		シオフキ製貝刃	R								1					1	
		ミルクイ製貝刃	R										1			1	
			破片											1	1	2	
		カガミガイ製貝刃	破片								1					1	
		アサリ製貝刃	R			1										1	
		ウチムラサキ製貝刃	L						2	1						3	
			R					1		2						3	
		ハマグリ製貝刃	L			1		2	2	23			3	1		32	
			R			4	3	3	3	30			2	1		46	
			破片			1	2	1	1	29			3		1	38	
		ハマグリ製有孔貝刃	R			1										1	
		チョウセンハマグリ製貝刃	L										1			1	
		オキシジミ製貝刃	L										2			2	
			R										1			1	
		ヘラ？	ハマグリ磨製製品	L					1								1
	不明							1								1	
装身具	貝 輪 および 未成品	オオツタノハ製貝輪								1					1		
		オオツタノハ製貝輪未成品						1							1		
		ボウシュウボラ製貝輪		1						2	2				5		
		タマキガイ科貝輪未成品	R											1	1		
			不明				1	48	3	5		31		2	3	93	
		イタボガキ製貝輪未成品	R							1						1	
	ザルガイ製貝輪未成品	L						1							1		
垂飾？	シオフキ製有孔貝製品				1									1			
計				1	1	15	8	209	63	219	2	78	96	72	16	780	

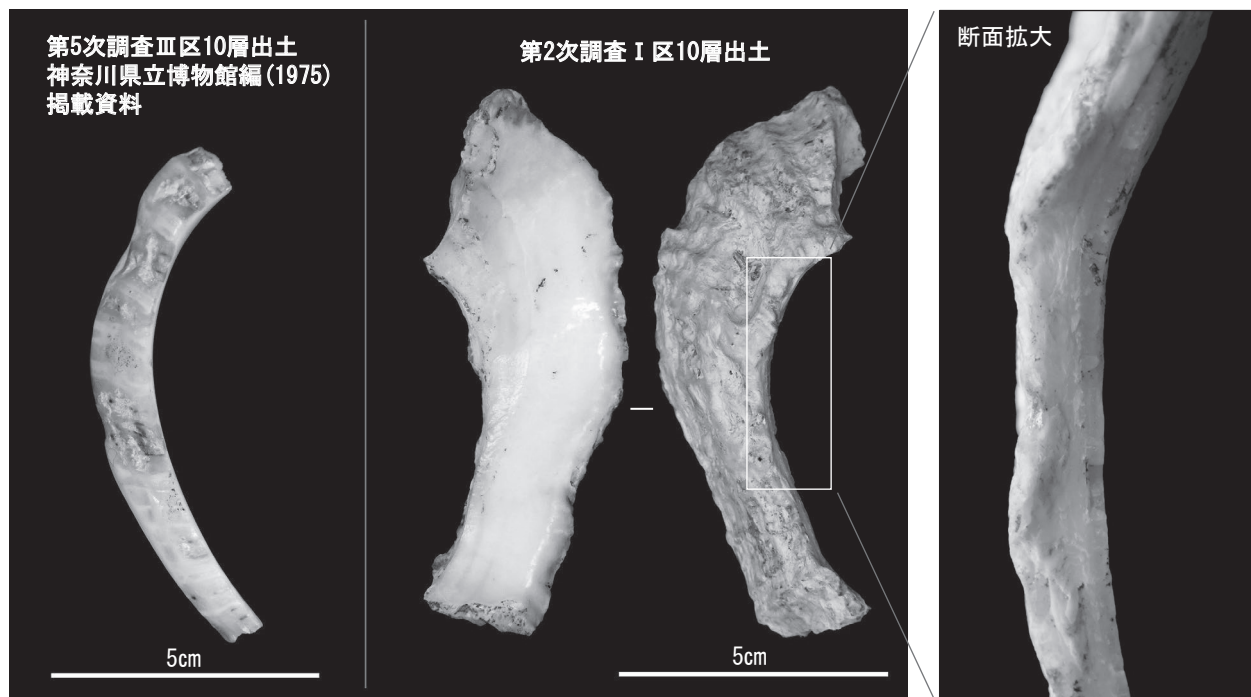


図 55 神奈川県立博物館編(1975)掲載オオツタノハ製貝輪(左)と資料調査で発見されたオオツタノハ製貝輪未成品(右)

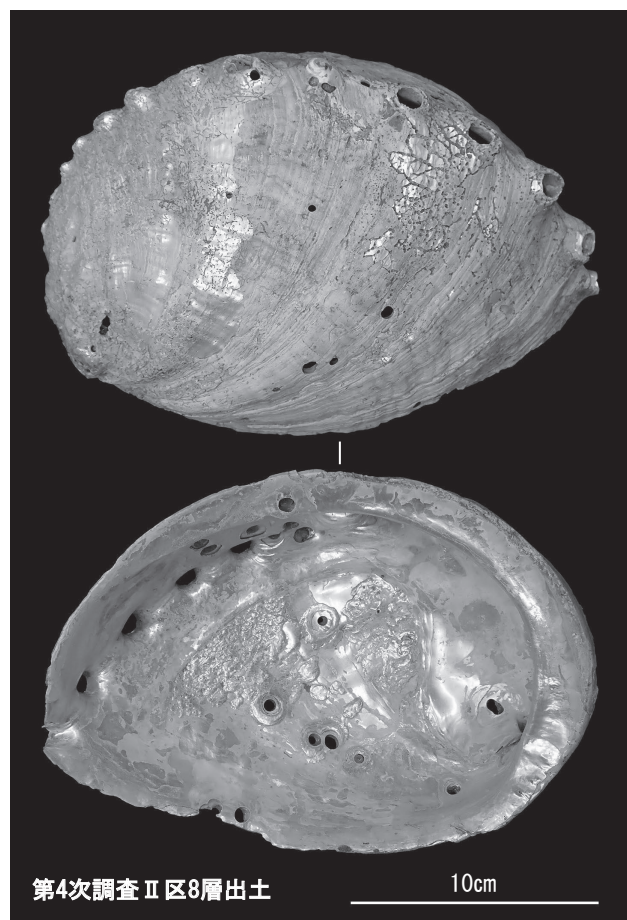


図 56 完形で出土したアワビ類死貝



図 57 イトマキボラ科製貝錐(第5次調査Ⅲ区10層)

数え、利器と装身具に大別した（表4）。なお、神奈川県立博物館編（1974）に報告されていた「第3次調査0区11層出土No.129 アカニシ製腕輪形貝器（第9図-129・図版7-129、神奈川県指定重要文化財）」は誤同定であり「ボウシュウボラ」に再同定した。間口洞窟遺跡の出土貝類遺体には、アカニシは1点も含まれていないことが確認された。

資料調査成果として特筆されるのは、オオツタノハ製貝輪未成品の発見である（図55右）。再整理作業中に、多量のアワビ類破片に混ざっていたオオツタノハ製貝輪未成品1点を発見した。間口洞窟遺跡では、これまでの調査でオオツタノハ製貝輪が1点（第5次調査Ⅲ区10層出土No.223 腕輪形貝器（第7図-223・図版6-223、神奈川県立博物館編1975、図55左））が発見されており、神奈川県指定重要文化財に指定されている。破損して出土しているが全体に入念な研磨が施され光沢を帯びる完成品である。一方、今回の資料調査で発見されたオオツタノハ製貝輪は、殻表面に自然面を残し破断面も未研磨であり、製作途中の未成品であった。未成品の発見は、伊豆諸島に分布し東京湾には生息しないオオツタノハが間口洞窟遺跡に搬入され、遺跡内で貝輪製作が行われていた可能性を示す資料として重要である。また、貝輪の製作過程を示す資料としても位置付けられよう。

前述した通り、間口洞窟遺跡からはアワビ類破片が多量に出土した。破片資料に対して完形個体および螺塔部が遺存する個体が著しく少ない産状から、破片は人為的に打割された結果と考えられ、周知のアワビ製貝製品の出土を鑑みると当遺跡は弥生中期から後期にかけてアワビ類を素材とした貝製品製作が行われていた生産遺跡という側面を持っていたことがあらためて指摘される。遺跡から出土した腹足綱を定量的に記載する際は、重複して計数することを避けるため完形個体および殻口や軸部が遺存する個体を1個体として計数する方法が一般的である。しかし、間口洞窟遺跡においては完形個体および螺塔部の点数で記載すると実際の出土数よりも少なくなってしまうため、破片も全点計数し集計した（表4）。破片資料を点数化したことにより、洞窟中央～奥部のⅡ区・Ⅲ区では完形個体および螺塔部の出土もみられるが、洞窟開口部～中央の0区・Ⅰ区・Ⅱ区では破片資料のみが出土するという出土傾向を看取することができた。洞窟内における空間利用を考えるうえで興味深い所見である。

アワビ類完形個体（図56）の再観察では、他の水生生物による穿孔が複数箇所観察された。穿孔は内面から外面に貫通している箇所もあり、外面には虫食い痕や水磨痕も認められることから、打ち上げ貝の死殻であることが確認された。当遺跡では鹿角製アワビオコシの出土が知られていることから、アワビ類の獲得においては鹿角製アワビオコシを利用した潜水漁が行われていたと考えられてきたが、アワビ類の獲得には打ち上げ貝の採集も行われていたことが明らかとなった。食料利用できない死殻採集の目的は、貝製品素材の獲得であったことが指摘される。

第5次調査Ⅲ区10層からは、イトマキボラ科製貝錐2点が発見された（図57）。最大長は、貝錐-1は57.6mm、貝錐-2は62.6mmを測る。表面から断面に至るまで軸部全体が入念に研磨されており、水管部や軸先端部はよく磨かれ光沢を帯びている。貝錐-1は軸先端部が欠損しているが、貝錐-2は欠損のない完形で出土した。10層では未加工のナガニシとツバクロナガニシが各1～2点出土しており、これらイトマキボラ科の巻貝は貝錐の素材として遺跡内に持ち込まれていた可能性が考えられる。また、東京湾地域では管見の限り当資料のような貝製品の類例は無い。時代と地域が異なるが、類例として挙げられるのは和歌山県田辺市に所在する磯間岩陰遺跡の第1号石室（古墳時代）から出土したヒメイトマキボラ製貝錐である（黒住2021）。磯間岩陰遺跡の貝錐は、より体層部が除去された形態を呈している。今回の資料調査で発見されたイトマキボラ科製貝錐は、古墳時代の磯間岩陰遺跡に先行する弥生時代中期の出土事例として注目に値す

る。

タマキガイ科では貝輪未成品が多く出土し、10層・11層では57点、8層では37点、計94点を数えた(表4)。当遺跡では、弥生中期から後期にかけてタマキガイ科を素材とした貝輪製作も行われていたと考えられる。完形で出土した個体はほとんど無く、殻の殻頂部～中央部が打割された状態で出土した(図58～図60)。また、再観察によって内外面に虫食い痕、水磨痕が全点に確認されたことから、全点が打ち上げ貝の採集により獲得された死殻であることが明らかとなった。殻長の計測では、10層の最小は57.0mm、最大は75.0mm、平均は64.7mm、8層の平均は67.0mm、最小は60.2mm、最大は74.7mmである(図61)。両時期とも同程度のサイズのタマキガイ科を採集しており、採集されたタマキガイ科は大きさに関わらず貝輪素材として用いられ加工対象とされていたことが指摘される。また、研磨が施されている完成品と考えられる貝輪は神奈川県立博物館編(1975)に掲載されている「第5次調査Ⅲ区10層No.223腕輪形貝器(第7図-224、図版6-224)」1点のみであり、その他多くの貝輪は未研磨で製作途中である未成品の状態で出土していることが確認された。

ハマグリでは貝刃が多く出土し(図62)、10層・11層では106点、8層では11点、計117点を数えた(表4)。出土貝類組成ではほぼ外海岩礁性群集で占められるためパーセンテージとして表れないが、間口洞窟遺跡からはハマグリなど内湾砂泥底群集も出土している。遺跡周囲の岩礁域には生息しないため、間口洞窟遺跡から1kmほど西方にある江奈湾など内湾潮間帯での貝類採集も行われていたと考えられる。10層の貝刃44点の殻長を計測し、最小は45.5mm、最大は92.8mm、平均は68.5mmであった(図63)。殻長70mm～75mmにややピークが見られるものの、ハマグリはサイズに関わらず貝刃として加工されていたことが指摘される。

考察

資料調査を実施したことによって、これまで詳細が不明であった弥生時代遺跡の貝層の内容を定量的に明らかにすることができた。調査報告が古い遺跡から2000年代に報告が行われている遺跡までが含まれており、遺跡によって調査方法や貝層の規模が異なるが、資料調査成果と周知の報告に基づき東京湾西岸における弥生時代の貝類資源利用について考察を行う。主に東京湾西岸に所在する弥生遺跡を対象とするが、比較のため相模湾に面する池子遺跡も検討に加えた。各遺跡の貝類組成は、弥生二丁目遺跡は東京大学文学部考古学研究室編(1979)、久ヶ原遺跡は甲野(1930)、熊野神社遺跡は金子(1991)、折本西原遺跡は金子・中村(1988)、三殿台遺跡は金子・中村(2011)、赤坂遺跡は赤坂遺跡調査団編(2001)、池子遺跡は松島(1999)に基づき作成した。

各遺跡の出土貝類組成と貝塚の分布を図64に示した。各遺跡の出土貝類組成は、各遺跡の立地と周辺の海浜環境を反映した貝類組成であることが指摘され、各遺跡では周辺海域で貝類採集を行っていたことが推察される。相模湾に面した池子遺跡では、スガイなど岩礁性群集とイボキサゴなど内湾砂泥底群集に二分されるが、外海に面した岩礁域の間口洞窟遺跡では各時期を通して岩礁性貝類群集が8割以上を占める。三浦半島以北の台地上に分布する遺跡では、内湾砂泥性群集のマガキとハマグリが主体を占めている遺跡、マガキが主体を占める遺跡、ハマグリが主体を占める遺跡の3パターンに分類され、その他に伴って出土している貝類遺体は遺跡ごとに多様である。出土点数が不明のため貝類組成に加えることができなかったが、九段下貝塚遺跡(弥生後期・図1-③)ではマガキ主体(和島1960)、牢尻台遺跡(弥生中期・図1-⑨)では

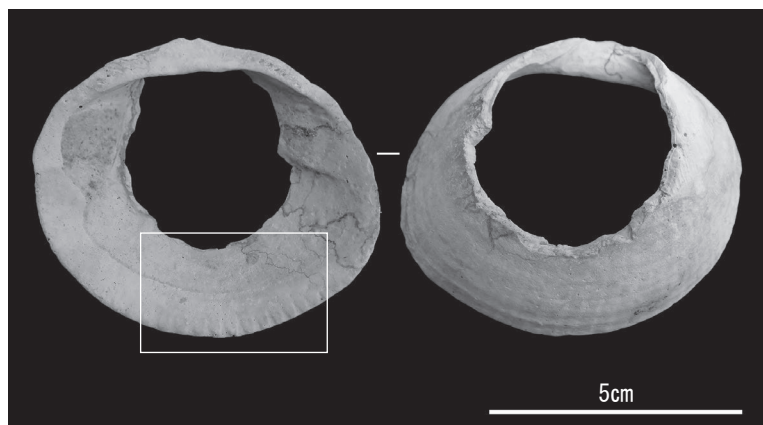


図 58 第 5 次調査Ⅲ区 8 層出土タマキガイ科製貝輪未成品

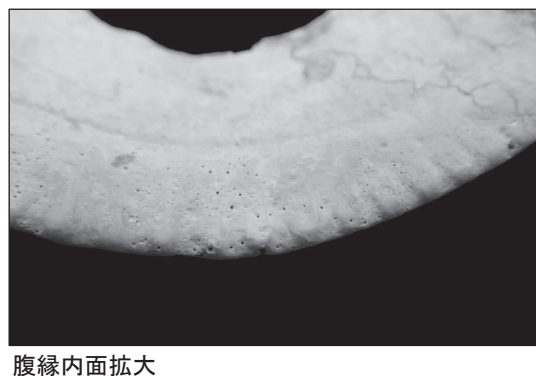


図 59 第 4 次調査Ⅱ区 10 層出土
タマキガイ科製貝輪未成品

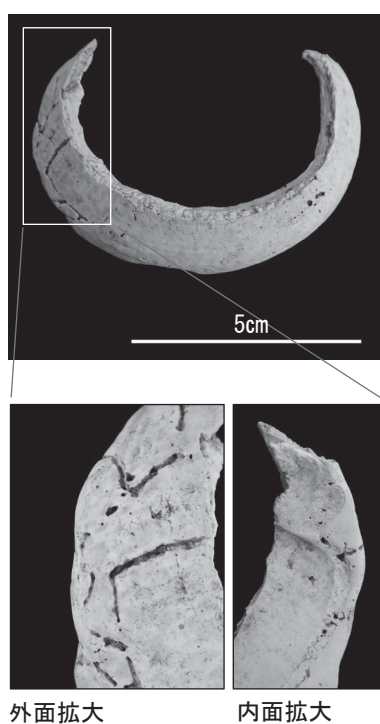


図 60 第 4 次調査Ⅱ区 8 層出土
タマキガイ科製貝輪未成品

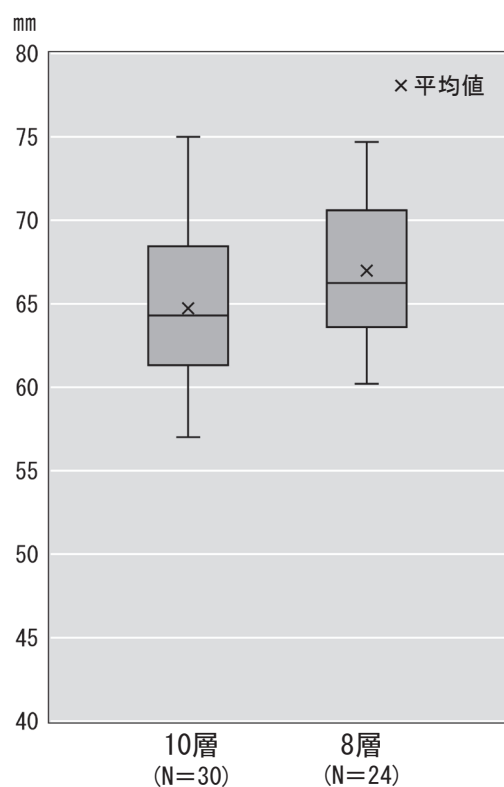
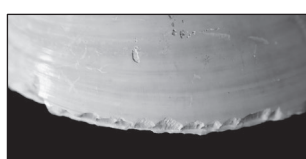
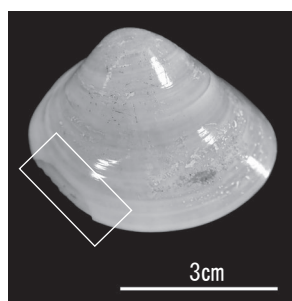
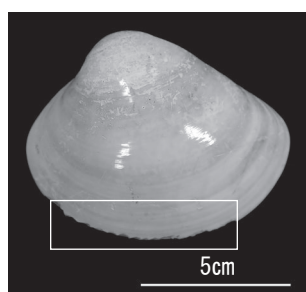
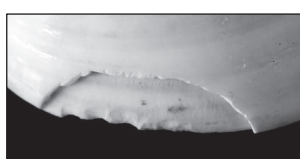


図 61 タマキガイ科製貝輪未成品の殻長



刃部拡大
図 62 ハマグリ製貝刃



刃部拡大

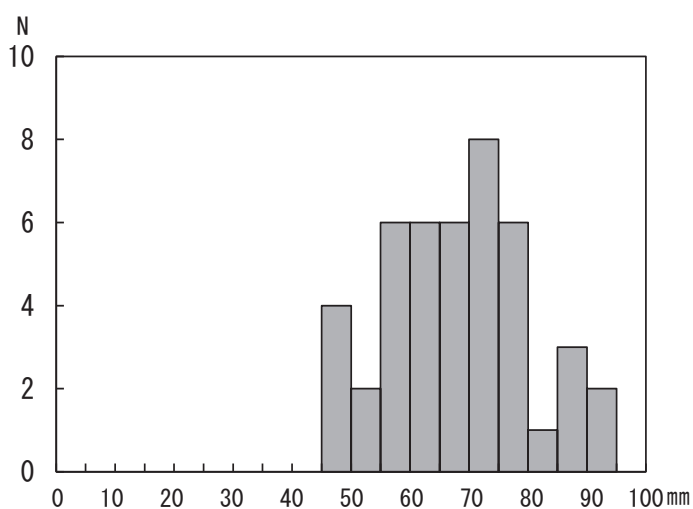


図 63 間口洞窟遺跡ハマグリ製貝刃殻長分布
(10 層・N = 44)

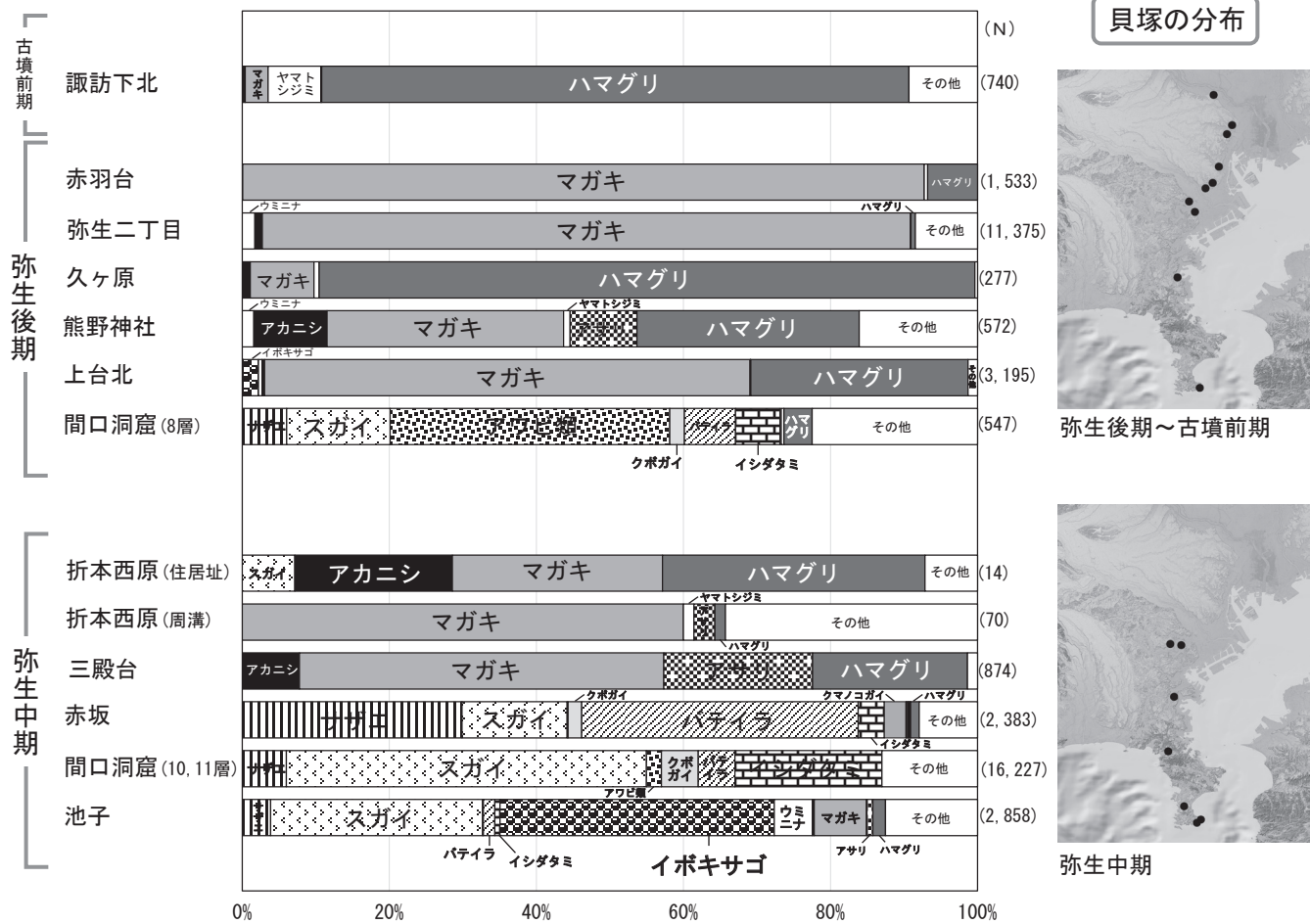


図 64 出土貝類組成と弥生時代～古墳時代前期の貝塚分布

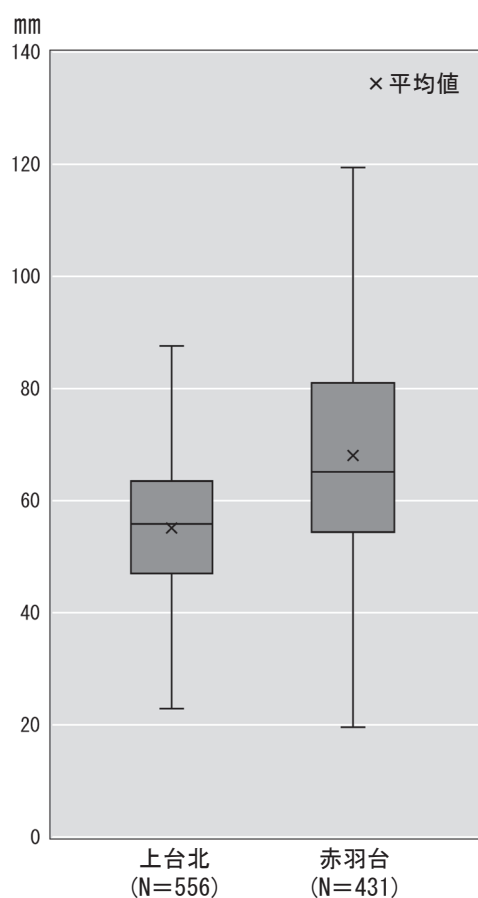


図 65 マガキ殻高分布 (右軸)

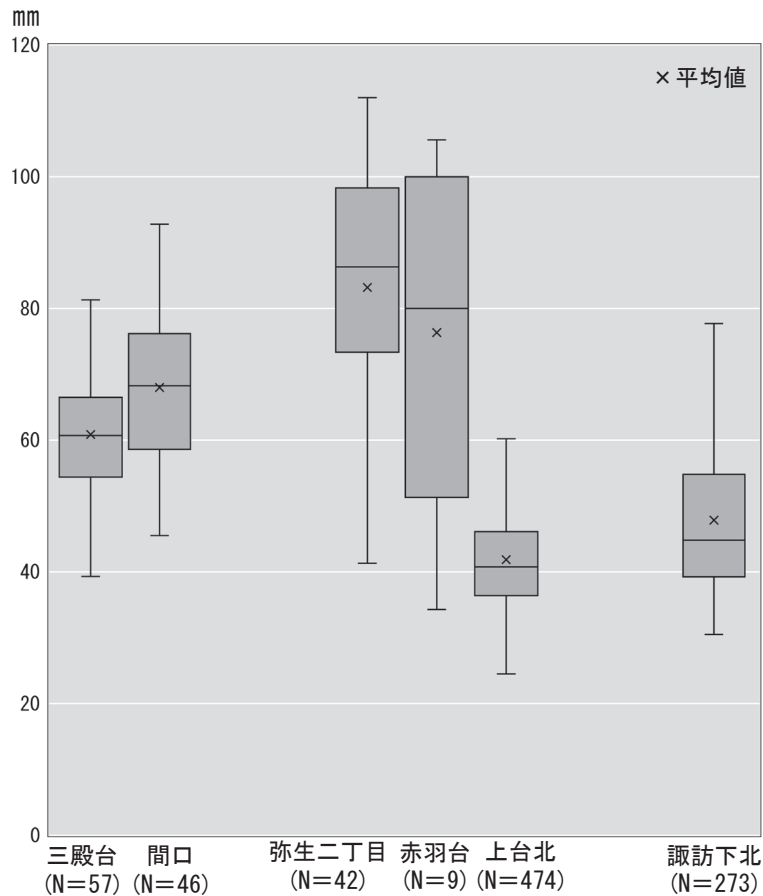


図 66 東京湾西岸のハマグリ殻長分布

ハマグリ主体（横浜市歴史博物館編 2012）、杉田東漸寺貝塚（弥生終末～古墳前期・図 1 - ⑪）ではハマグリ主体（松島他 2006）、大浦山洞窟遺跡（図 1 - ⑭）では外海岩礁性群集主体である（三浦市教育委員会編 1997）。

貝塚の分布では、時期差が看取された。弥生時代中期では、鶴見川以南の台地上～三浦半島南部までの範囲に分布する。弥生時代後期・古墳時代前期では、武蔵野台地上に分布するようになり、分布に変化が認められた。

資料調査において貝類遺体の計測を行ったことにより、遺跡間でのサイズ比較が可能となった。赤羽台遺跡と上台北遺跡のマガキのサイズ比較では、赤羽台遺跡で採集されていたマガキがより大型であることが明らかとなった（図 65）。両遺跡ともマガキが集約的に採集されていた遺跡であるが、立地する荒川流域と鶴見川流域のマガキ生息環境の違いがサイズの差異に反映されているものと考えられる。

ハマグリについても、資料調査での計測値に基づき殻長分布を比較した（図 66）。ハマグリのサイズは遺跡によってばらつきがあることが明らかとなった。赤羽台遺跡・弥生二丁目遺跡と上台北遺跡・諏訪下北遺跡を比較すると平均値にして約 40mm の違いが見られた。マガキが 8 割以上を占める赤羽台遺跡、弥生二丁目遺跡では、出土点数は少ないが大型の個体が採集されている点は興味深い。杉田東漸寺貝塚（弥生終末～古墳前期）のハマグリ殻長平均は 46.9mm（N = 173、松島他 2006）であり、諏訪下北遺跡の計測値に近似する。東京湾地域や東海地域の弥生時代の貝塚では、縄文時代と比べて出土ハマグリの大型化が指摘されている（樋泉 1991・山崎 2019）。大型化の要因としては、農耕を受容した生業活動の変化、貝類の需要低下と自然個体群の齢構成の高齢化が挙げられている。しかし、東京湾西岸では遺跡によって採集されたハマグリのサイズにばらつきが大きいことから、大型化の傾向は必ずしも当てはまらないことが指摘される。

資料調査を実施した遺跡ではすべての遺跡からハマグリ製貝刃が発見された。これまで東京湾西岸では、三浦半島南部の海蝕洞窟遺跡群からのみハマグリ製貝刃の出土が知られていたが、台地上の集落においても分布することが明らかとなった点は重要な成果である。筆者は稲の収穫具としての用途を提示したことがあるが（吉永 2023）、東京湾西岸の台地上の遺跡における貝刃の用途の検討は今後の課題である。上台北遺跡から見つかったアワビ類破片は、小さな遺物であるが三浦半島南部の海蝕洞窟遺跡群との繋がりを想起させるものとして注目に値する。また、多様な貝製品が報告されていた間口洞窟遺跡において、これまで知られていなかったオオツタノハ製貝輪未成品とイトマキボラ科製貝錐が新たに発見されたことは重要な資料の追加となった。

まとめ

これまで貝層の内容が不明であった東京湾西岸の弥生時代～古墳時代前期の貝類遺体について資料調査を実施した。同地域における貝類遺体の定量的記載と新たに見出した貝製品の報告、再同定を行うことができ、貝類資源利用の様相の一端を明らかにすることができた。農耕が開始される弥生時代では、縄文時代と比較すると貝層の形成は低調化するが、各遺跡において食料利用だけでなく貝刃など製品としての利用も行われていた点は新発見である。本報告が東京湾西岸における弥生時代の生業活動を明らかにする一助となれば幸いである。

謝辞

赤羽台遺跡の資料調査では鈴木直人氏（北区飛鳥山博物館）に御協力を賜りました。弥生二丁目遺跡の資料調査では設楽博巳氏（東京大学）に御協力を賜りました。上台北遺跡・諏訪下北遺跡の資料調査では古屋紀之氏・中嶋友氏（公益財団法人横浜市ふるさと歴史財団埋蔵文化財センター）に御協力を賜りました。三殿台遺跡の資料調査では横浜市三殿台考古館に御協力を賜りました。間口洞窟遺跡の資料調査では神奈川県立歴史博物館に御協力を賜りました。参考文献のうち『折本西原遺跡－Ⅰ』につきましては安藤広道氏（慶應義塾大学）に御協力を賜りました。末筆ながら記して深謝申し上げます。

参考文献

赤坂遺跡調査団編 2001 『赤坂遺跡』 三浦市教育委員会

金子浩昌・中村若江 1988 「折本西原遺跡出土の動物遺体」『折本西原遺跡－Ⅰ』 折本西原遺跡調査団 314-324

金子浩昌 1991 「山王三丁目遺跡溝状遺構出土の貝類」『山王三丁目遺跡』 熊野神社遺跡群調査団・佐々木藤雄編 226-236

金子浩昌・中村若枝 2011 「縄文から弥生へ－三殿台遺跡にみる漁撈・狩猟活動の変容－」『大昔のムラを掘る－三殿台遺跡発掘 50 年』 横浜市歴史博物館

神奈川県立博物館編 1972 『神奈川県立博物館発掘調査報告書第 6 号間口洞窟遺跡資料編』 神奈川県立博物館

神奈川県立博物館編 1973 『神奈川県立博物館発掘調査報告書第 7 号間口洞窟遺跡（1）本文編』 神奈川県立博物館

神奈川県立博物館編 1974 『神奈川県立博物館発掘調査報告書第 8 号間口洞窟遺跡（2）』 神奈川県立博物館

神奈川県立博物館編 1975 『神奈川県立博物館発掘調査報告書第 9 号間口洞窟遺跡（3）』 神奈川県立博物館

神沢勇一 1981 「貝庖丁の再検討－神奈川県三浦市間口洞窟遺跡出土例を中心に－」『神奈川県立博物館研究報告』9 17-41

久が原グリーンハイツ内遺跡発掘調査団編 1999 『久が原グリーンハイツ内遺跡』 久が原グリーンハイツ内遺跡発掘調査団

黒住耐二 2021a 「磯間岩陰遺跡出土の貝類遺体について」『磯間岩陰遺跡の研究－分析・考察編－』 田辺市教育委員会

黒住耐二 2021b 『くらべてわかる貝殻』 山と溪谷社

甲野勇 1930 「東京府下池上町久ヶ原彌生式竪穴に就て」『史前學雑誌』 1-2 史前學會 17-27

財団法人かながわ考古学財団編 1999 『池子遺跡群Ⅹ』 財団法人かながわ考古学財団

財団法人横浜市ふるさと歴史財団埋蔵文化財センター編 2001 年 『埋文よこはま 3』 財団法人横浜市ふるさと歴史財団埋蔵文化財センター

杉山浩平 2018 「池子遺跡の自然遺物」『弥生時代食の多角的研究－池子遺跡を科学する－』 六一書房

- 諏訪下北遺跡発掘調査団編 1990 『横浜市港北区 諏訪下北遺跡発掘調査報告書』 株式会社佐田住宅センター
- 高橋健 2019 「上台遺跡出土の人面付土器」『横浜市歴史博物館紀要』23 公益財団法人横浜市ふるさと歴史財団 67-84
- 鎮西清高 1982 「カキの古生態学 (2)」『化石』32 日本古生物学会 19-27
- 樋泉岳二 1991 「関東地方の弥生時代貝塚」『考古学ジャーナル』336 ニュー・サイエンス社 16-22
- 樋泉岳二 1999 「東京湾地域における完新世の海洋環境変遷と縄文貝塚形成史」『国立歴史民俗博物館研究報告』81 国立歴史民俗博物館 289-307
- 東京大学文学部考古学研究室編 1979 『向ヶ岡貝塚－東京大学構内弥生二丁目遺跡の発掘調査報告－』 東京大学文学部
- 東北新幹線赤羽地区遺跡調査会編
1992 『赤羽台遺跡－弥生時代～古墳時代前期－本文』 東北新幹線赤羽地区遺跡調査会・東日本旅客鉄道株式会社
- 東京都千代田区 1998 『新編 千代田区史 通史編』
- 松島義章 1984 「日本列島における後氷期の浅海性貝類群集－特に環境変遷に伴うその時間・空間的変遷－」『神奈川県立博物館研究報告 (自然科学)』15 37-109
- 松島義章 1999 「No.A-1 地点における弥生時代の貝類」『かながわ考古学財団調査報告 46: 池子遺跡群 10』 財団法人かながわ考古学財団 879-885
- 松島義章・田口公則・川名ひろみ 2006 「第3次杉田東漸寺貝塚発掘調査で出土の貝類について」『杉田東漸寺貝塚本発掘調査報告 2』 横浜市教育委員会
- 三浦市教育委員会編 1997 『三浦市埋蔵文化財調査報告書第4集大浦山洞穴』 三浦市教育委員会
- 宮崎重雄 1992 「赤羽台遺跡出土の獣骨類」『赤羽台遺跡－古墳時代中期～近代篇－』 東北新幹線赤羽地区遺跡調査会・東日本旅客鉄道株式会社 252-257
- 山崎健 2019 『農耕開始期の動物考古学』 六一書房
- 横浜市歴史博物館編 2012 『企画展海にこぎ出せ！弥生人』（公財）横浜市ふるさと歴史財団
- 横浜市歴史博物館・（公財）横浜市ふるさと歴史財団埋蔵文化財センター・横浜市三殿台考古館編 2017 『横浜に稲作がやってきた!?』 横浜市歴史博物館
- 吉田格 1940 「武蔵國久ヶ原町の一彌生式竪穴發掘に就て」『貝塚』20 土曜会 95-96
- 吉永亜紀子 2022 「間口洞窟遺跡の弥生人は動物資源をどう利用していた？」『特別展洞窟遺跡を掘る－海蝕洞窟の考古学－』 神奈川県立博物館
- 吉永亜紀子 2023 「神奈川県間口洞窟遺跡における弥生時代の魚類遺体」『動物考古学』40 日本動物考古学会 47-52
- 和島誠一 1960 「九段上貝塚の発掘－初期の農耕集落－」『千代田区史 上巻』 千代田区役所 147-169
- 和島誠一 1965 『三殿台 横浜市磯子区三殿台遺跡集落址調査報告』 横浜市教育委員会

〔総合研究大学院大学統合進化科学研究センター客員研究員〕